

日本書紀傳

十九卷_七

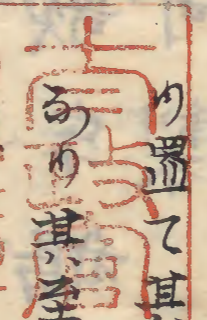
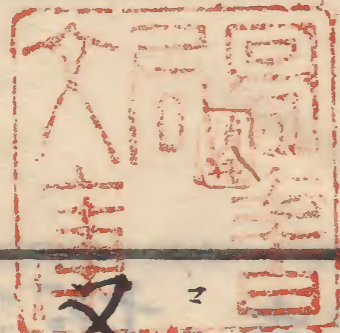
五十五

和 一〇五二號

内閣文庫		
番號	和	10522
冊數	156 (64)	
函號	特	85 1



致部首
文庫印



り置て其祈禱の事をしも悉くの書し極むる義ある
あり其座の意ハ傳十五四下云る如く行足ありバ
致也行足ありを自然るて已然為るとの差ハ依て言
の別あり如きあるあり皇極天皇三年御紀ハも祭
致富老人還少あどの致ハ漢文の格あり有けれども
又我ガ古言ハも合る者あり漢籍大云物ハも欲
誠其意者先致其知致知在格物物格而後知至知至
而後意誠と有て致之至と相照應せるも此ハ同ト
マタ

又猿女君遠祖天鈿女命則乎

持茅纏之稍立於天石窟戸之

モナ
チ
マキ
ノ
ホニラ
ノ
タ
ミ
テ
ア
ノ
ノ
イ
ハ
ヤ
ド
ノ

の日本書紀傳十九

〇二百二十六

内一六八

前巧マヘニタクミニ作俳優ワガテキオマタ亦以天香山之真アマノカグヤマノマ
 坂樹サカキ為鬘シカツラト以蘿ミカゲ
 手テ纏ユラ此コレ云イフ而ニテ火處ホドコロ燒タキ西ウ復フセラ槽ケ置フセラ
 顯カ神明ムカ之ノ憑リ談ス憑リ顯カ神明ムカ之ノ憑リ談ス
 可歌カカ于コ此コレ多タ手テ梨リ牟ム鵝ガ該カ云イフ須ス積ツク此コレ云イフ而ニテ火處ホドコロ燒タキ西ウ復フセラ槽ケ置フセラ
 梨リ牟ム鵝ガ該カ云イフ須ス積ツク此コレ云イフ而ニテ火處ホドコロ燒タキ西ウ復フセラ槽ケ置フセラ

此ハ天鈿女命アマノニギハヤヒノ神樂カミガキヲ申マウサレル一ヒト段タビ有アリシ紀記拾遺キキシウイ共トモハ差サセル異イハ無ナキ物モノナリ何ナニレドモ天鈿女命アマノニギハヤヒノ後世ノチノヨ神樂カミガキハ謂イハレル人ヒト長ナガシク當タルル御務ミカドノツカサツノ事コトハ有アリシ其支度用意シヨクノヨウイノ御事ミカドノツカサツハ於オテハ惣ソウテ此コレヲ漏ルサレルナリ故言コトヲ加カヘテ心得ココロエズハ得エズ有アリシトウリケル古史コシ勞ロウ五十四段イハヒヤクヨウシヨウ徴シヲ引ヒキテ上代本記ウヘノホノキハハ神樂カミガキ之ノ起ヒ猿サマ女メ君祖キミノミヤコ天鈿女命アマノニギハヤヒ採ツク天香山アマノカミヤマ竹タケ其節ノノ間マ離リ凡ソト孔アナ通ス和氣ニギハヤヒ今世イマノヨ也ナリ有アリシ樂器ガクノ笛フエノ起ヒ是コトアリシ鎮魂祭ニギハヤヒハ此コレノ故事コトヲ擬行ニギハヤヒハハ御事ミカドノツカサツ有アリシ儀ノ式ノハ神祇カミヤミ伯喚フク琴師カミ各オノオノ二人ニヒト共トモ稱ナヅケ唯次喚フク笛工フエノウ各オノオノ二人ニヒト共トモ稱ナヅケ唯伯喚フク琴カミ笛フエ相アヒ和ニ詞コト云イフ美許ミコト登ノボ爾ニ布フ曳ヒ

〇日本書紀傳十九
 〇三百二十七

安波 四人共称唯先吹笛一曲と有を以て其實ある事
知了水たけ天香山と賢木以下の物共を此山採る
事例の如し竹を笛製る事ハ継体天皇七年御紀春
日皇女御歌ハ那峨例俱屢駄能以矩美娜聞全囊聞
漢考ニ陞鳴磨菅等你都俱唎須衛陞鳴磨府曳你都俱
唎府企雛須略マ有ハ八組竹苅竹本方者琴尔作未方
者笛尔作吹鳴あり備此ハ其吹笛マ有ハ神ハ姓氏録
河内国神 小笛吹連火明命之後也と見え又五百木部
别天孫 小笛吹連火明命之後也と見え又五百木部
連火明命後也と有り又 左京神 伊福部尾張連同祖火
明命之後也と見え又三氏共ハ出自相同トきを清和

天皇寶錄貞觀四年 月の下ハ播磨国揖保郡人雅樂
苗生無位伊福部貞復本姓五百木部連マ云事有り此五百
木部ハ氣吹部マ云事あるを伊福部の福ハ吹の略ハ
了故ハ其本ハ復ハあり若て 職員令義解ハ
笛生六人掌習雜笛苗工八人 謂供此同樂而吹笛者其
人各在其樂マ所見たれハ此笛生苗工共ハ唐我以下
生中也 小諸樂の吹笛マハ別ハて我古の神樂を傳へたる笛
師ハ在ありけり若て中臣忌部の例ハ依て神代の源
ハ所り見ると此天鈿女命の神樂の笛工ハ正しく火
明命ハ亦ハ御在し坐へりけり 通證ハ上代本記を
初て引出たるを師

日本書紀傳十九 〇三百二十八

の徴の然次第を能く列ね引ねたるが因て今此説の
 出来ぬをて突の師の賜物あり其古史傳の如何
 委しく説出づればけむ今如此記し置て其書の世
 小公の行ハ此の時を待むとす此大明命天孫降臨
 章の瓊杵等の御子有ハ誤あり此許ハ天孫本紀
 小謂ゆる饒速日命御在し坐す之あるが里しき
 次小其上代本記小亦天香弓興並叩弦

今世謂和之有ハ本朝事始小知琴号也麻上古
 琴其縁也

天津神樂奏令加奈止美乃余製之但横雙六張弓以狝
 乃字賀世緒第以須雅乃葉左右之手奏又号須賀古止
 止亦号須賀乃字都波有須賀二幾乃調以是爲檀觴加
 奈止美者皇產靈與神皇產靈之子也之有ハて殊小詳
 あるを類聚神祇本源ハ古語云人長者天鈿女命也

△和琴の起ハ古六
 張を引鳴して此を
 神樂ハ用ひけるを
 ハハして後ハ人琴ハ
 作り移せるハ申傳
 了之上総国の海物の
 古き注文中ハ古六
 張と書て御神樂
 料と書り其ハ甚
 小事あり

略中御琴神金鷄命孫長白羽命也用天香弓六張叩弦也
 即高幡上金鷄居因以象故名之鷄琴也今世号和之云
 以次ハ亦金色鷄飛来于弓弭其鷄 熾狀如流雷
 由是作其尾形也之見えたる天香弓ハ天孫降臨章の
 天児弓之同トきを其書四一書ハ天槍弓之有ハハ
 此も天香山の柁木を以て造るねたる弓ありある
 可し此を六張並ふ云華ハ鴨長明ハ無名抄上ハ見
 元又中原康富記天安六年九月孟日下ハ大炊御門殿被仰云和琴天照太
 神若戸出給候時神樂器也並弓六張彈之依之有六弦
 云ニと所見たる是あり其和琴云事ハ古今集物名

小加良許登と有て歌小敷島の倭の唐琴の云云と
 詠る、地名の有りども本より唐琴と云（彼より渡りたる）て琴瑟の
 類の号けたる事の有り對へつる者ある可し和名抄
 の新羅琴又ハ（タカラ）筥篋（タカラ）候と其出る国名を呼ぶを以て
 知へきあり右にも引る鎮魂祭儀の琴笛相和を詞云
 美許登尔布曳安波世と註され其を四時祭式（事）の神祇
 伯召御琴彈某甲云云又命云御琴笛會之云云 即調
 御琴云云と見え江次第内侍所御神樂條の召御琴可
 仕者其人把和琴著膝突と有か如く常の和琴と云
 ハ遍く世に用ゐるハ唐琴あるハ故ハ殊更ハ然云ハ

六文永年中香
 取神宮造替注
 文神寶の中和
 琴一張と有て
 下小長四又五寸
 弘九寸手本七寸
 縮六筋有之琴
 在六任先例今
 度始而錦油置
 袋入之と見え
 古製の
 様知られたる若

り有ける和名抄ハ日本琴萬葉集云梧桐日本琴一面
 天平元年十月七日大伴淡等附使並贈中衛督藤原房
 前卿之書所記也體似箏而短少有六弦俗用倭琴二字
 夜 萬止古止大歌所有鳩尾琴 止此乃字古止倭
 琴首造鳩尾之形也と有て其始弓六張を並べて唯弦
 の三を叩く事あるハ始りて如此く枚ハ弦を懸けて
 弾く事已く神代ハ起れる由ハ古事記ハ天沼琴ハて
 灼然ハ斯ルハ此ハ始りて素戔鳴尊の御琴ハハも
 天下萬国ハ在ゆる琴の祖琴ハ亦ハ有ける 右の梧桐
 万葉五卷ハ 對馬結石山孫枝と有て此琴夢化娘
 子云々の文見え又其娘子の詠る歌有り倭唐琴ハハ

也和名抄云琴を帝王世説云炎帝作五絃琴世本云神
農作之琴操云伏羲作之有羽箏を凡俗通云神農造
箏或云蒙恬所造秦也之云然我大國主神御
考之見以田云其大昊伏羲氏之云然我大國主神御
在坐其神田云其大昊伏羲氏之云然我大國主神御
予其神田云其大昊伏羲氏之云然我大國主神御
一坐其神田云其大昊伏羲氏之云然我大國主神御
南坐其神田云其大昊伏羲氏之云然我大國主神御
峰有窟裏所造天下大神御琴長七尺廣三尺厚一尺
五寸又有石神高二尺四寸故云琴引山之有也
田有之事有石神高二尺四寸故云琴引山之有也
の傳有之却り此北史倭傳云樂有五絃琴云云
絃琴有之却り此北史倭傳云樂有五絃琴云云
故記絶たるを此中在古事記甕栗宮段如調八
八絃琴治賜天下云云見元又東舞歌七絃の
り古製の六絃琴の外猶種々有和琴有ける
けり其和名抄の體似箏而短小有六絃と云るを伊勢

大嘗祭辰日儀
和琴二面と有て下
小各長六尺と有
此似箏而短小云
狀あり此を其大政
官符小供奉大嘗
會御鎮魂鷄尾
琴二面と見え又

本神宮式の神室の鷓尾琴一面と有て長八尺八寸頭
廣一尺末廣一尺七寸頭鷓尾一尺八寸と見えたるは
短小と云程の非ず神宮傳有るか古製にて常の
用ある和琴と異ありしや右の神祇本源の即高
幡上金鷄居因以象故名之鷓琴也今世号和琴是也と有て和
名抄を合せ見ると鷓琴と和琴と一物ある事著
明し又金色鷓飛来于弓弭其鷓燒狀如流雷由是作其
尾形也と有て就て考有る万葉九二十丁中神南備神依
板尔為抄乃と有る記傳六十丁中云此たる如く抄を
琴小造りて神の御靈を寄せ奉る料あり此下小覆槽

今令明解除并諸
大被

置顯神明之憑談之有也屬なる事あり有れば天照太
神の御璽を寄せ奉る御占の料ありと有りけり其
ハ皇太神宮儀式帳六月二日奉條以十五日夜乃亥時第一御門仁
御巫内人仁大御事請即替内人物忌等之後家之雜事云云有ハ件の鷄尾琴を申
請奉りあり其事を建久行事記ハ御占神事云云于
時御巫内人冠自外幣殿鷄尾御琴請件御門外東方候
御殿向先詔カ申次以笏御琴撥三度ニ別在警蹕次奉
下神其御歌阿波利矢遊波須度万字佐奴阿佐久良仁
天津神国津神於利万志万世阿波利矢遊波須度万字
佐奴安佐久良仁奈留伊加津千色於利万志万世阿波

△出させ御在
坐て

利矢遊波須度万字佐奴安佐久良仁上津大江下津大
江毛摩伊利太万江云ニ又御琴撥内喃音以清知以
不鳴不淨知也云云見元たる此歌ハ後世の風ハ
有ればも意ハ猶古の様あり 阿波利矢ハ古語拾
遺の此段ハ阿波礼阿那於茂志呂云云有ハ歌句ハ
の遊波須度万字佐奴ハ奴ハ武ハ通へるハて弓弭登
將申あり其遊波須ハ天香弓の事ハ今琴を用ふるを云ハ此ハ右ハ云る金色鷄飛来于弓弭
有ハ日神の感けさせ給へる御璽の依来坐て今も
照し給ハ玉祥の見ハれ給へるある由知ハ阿佐
久良ハ天下座アマカサクラある事右の奉下神ハて心得へ其初

歌ハ天神地祇を勸請し奉れるあり中歌の奈留伊加
津知ハ右ハ其鷄焼^焼状如流雷之有し此段の事を取て
云りし者あり終歌ハ上津大兄下津大兄も参坐せよ
みて此ハ此御占ハ仕奉り来りし古人の靈ハも参相
給へ^{みて右ハ引}可し然^{神依極之云義ハ此ハ在}以ハ此行事記の歌ハ假名遣
るも有れども此の故事ハ本着たる者ハあむ有け
る又右の本朝事始ハ謂ゆる須賀ニ幾ハ菅葉を以て
弦を搔たるあるが儀式帳ハ琴の御占有て後ハ大被
の事有れども由有り大被詞ハ天津菅曾^{本新断末新}
功氏^{又万葉三卷四十六丁ハ}之有れ相合へる者あり^{天有左佐羅能小野之七}

公此事下三百四十七
丁考合可一

相菅手取持而久堅乃天川原尔出立而潔身而麻之字
又益^{六卷十九丁ハ石二生菅根取而之努布草解除}
而益^{往水丹潔而益を又神樂酒殿歌ハ中臣の天ハ}
管を割被^{ハ祈りし事ハ云ハあむ有れ心得ハ}
斯^{ハ御琴を製るせ御在し坐し神ハ本朝事始ハ加}
奈止美命之有れ灼然^{又神祇本源ハ御琴神金鷄}
命孫長白羽命也之見元たれハ此時の彈琴神ハ長白
羽神ハ御在し坐れハ其菅搔の業ハ此神の成し初さ
廿給へる事灼然^{者ハあむ有ける鎮魂祭儀ハ神祇}
伯喚琴師名二人共^新并唯云ニ伯命琴笛相和^{詞云美許}
安波^{云ニ次調琴聲訖琴師彈弦與神部共歌二成略}
見元た^{琴師を大嘗祭式ハ}琴彈^{見元鎮魂祭式}

ハ御琴彈ヒと有る皆同ト者あり。備其調琴色託琴師彈
弦を新嘗會大歌并五節舞儀ハ比ぶるハ次調御琴空
撫御琴三色詞云年奈 須可ニ記次拍子三度詞云年 奈天奏教曲訖奏
五節略ト有ルハ彈弦之云ハ空撫ハナカキを為るを云て事の
意ハ彈合する歌あども無くて撫鳴す故の名ある可
ト東遊歌ハ比大千仁波田年古曾川久礼云ト有
ト下ト師說此歌乃乎之處頗異前歌之音振 又及其
其末琴之須加ニ本其詞替流阿拍子延也ト有を取て
源氏若紫卷ハ君ハ大殿ハ御在トけるハ例ハ女君速
ハも對面ト給ハ物擧モノケルト思え給ハて東を管撫

ト常陸ハ田をころ作れト云ハ歌を色ハ甚ナカ 婀娜
ト遊ヲカハ給ハりト書ハるを花鳥餘情ハ和琴ハ管撫片
ト神樂催馬樂ハ用ハ事有を云りト見元ナリ
予此伎の事ヲを全ハ知ハズバ云ハるト事ありト
此ノ考ヲを神代ノハ此時ハ弓六張を並ハたるを
萱葉ノト撫鳴ハハ可クトむを其ノ弓を換テ琴ハ
製ハるト然ル擬ハびを存テ更ニト撫彈ク事ノ秘ト
ハ成ルト有ルト可クト此ノ事ヲ未ダト又上代本記ハ木
考得ハズバ師ノ古史傳ヲ待チ者あり
木合ニ而備安樂之色ト有ハ謂ハトウ筈拍子の事あり
鎮魂祭儀ハ神部一人候拍子ト見元大歌并五節舞儀
ト撃拍子四人ト有ハ上ト謂ハトウ筈工琴師トどの如
ト其所為ハ仕奉ル人ヲ云ハリ神樂歌次第ハ御歌可

ハ五拍子ハ管撫
三拍子ハ片撫
云リ又管撫ト毎
樂曲終ハ管撫
撫ト云ハと見え
リ猶常夏卷トハ
可ク給ハハ和琴
有ル引奇ニ給ハト
云ハ唯速無キト
管撫ハ音ハ万の物
音陰リ通ヒテ云
ト無クト管撫ト
トト語給ハバ云ハ
給ハト管撫程ト
上卷トハ和琴ト
大臣の第一ハ和
給ハト御事ト云
云ハ心ハ任セト唯
撫合セハハ管撫
ハハの物音調ノ
へレれハハ妙ノ
面トハハ怪シト
オト見ヤ



仕支男召須歌人參候膝突_之筋遠腰仁差之間_亦笛筆
策乃音留_乃琴獨橙久間_亦合_而手_天為拍子_之出音
須云事の有を其裏書_乃記せる御前作法次第_乃次
笛止_天御琴尚毛不止須懸次本末_乃音頭_乃人各筋拍
子遠取御神事遠始_年有_乃拍子ある事知_れ此
たり然_乃江次第内侍所御神樂條_乃次神樂各借陪
從五位筋二枚打之次賢木御幣韓神_乃人長起舞_乃有
て其所_乃陪從_へる人の筋を借用_ひて拍子_乃為_る故
_乃筋拍子_乃ハ云_る趣_亦れども其木_ニ合_{こと}有_ける
ハ然_乃筋ある_乃ハ素_{より}非_りける事_ハ今云_ふ限_の

非_ずと雖も此_ハ止事を得_ざる考_有り其_ハ止由_ニ筆宮
の相殿_乃御在_し坐_す天兒屋命の御靈形の事を先上
代本記_の靈形筋天津賢木報副坐_と云_ひ御鎮座本縁
_乃御靈形筋坐是即天磐戸開之時天兒屋命祝詞啓
之筋也_と有_ハ甚_ニ異_{ある}説_ひて怪_しき事_ハ思_へり
し_らども今茲_ハ至_りて思_合す可_き事_{あり}有_ける其
天津賢木靴副坐_と云_るハ彼_天幣帛を取捧_給ひ_し事
の由_乃依_て御靈の筋_乃取_副るを云_{ある}可_く次_ハ祝
詞啓之筋也_と云_る筋ハ漢様の移_ろひたる後_ハ出_未
以_る者_ハて神代を去_る事遠_けれ_ハ然_る事_の有_へく

くハ侍るぬ物うく廣厚く祢辭祈啓し給ふ御業ハ兼
て木と木と打合せ給へるハ此神ありしより斯く説
ハ有ありけり斯れハ右ハ云る筈ハ筈拍子の事ある
を文旨ハして把筈の筈ハ云掠めたりし者ありけり
記傳十五九十四ハも世記ハ天兒屋命形筈坐と有を引
と筈ハ本外国の物ありハ如何あるを此ハ思ふハ實
ハハ筈ハハ非ハハも其形様の筈ハ如く見ゆる物有
る故ハ筈ハハ記したるハヤ有むと有ハ筈拍子あり
し事を思漏されたるあり又御鎮座次第記の頭書ハ
延佳按天 岩戸開之時天兒屋命捧持筈賢木之由神

代久遠也非金石何存矣と有も神人とも思えぬ却
説あり大倭神社注進狀ハ御歳神を八束巖稲為神
体と有も神代の舊物を傳たるハ非ずや然計ある神
の御上ハハ金石をも忽ハ腐し給ふ可く草木をも永
く存ハ可く物為させ御在し坐べりけり然ハ云
るまトさ事ハ有む有ける但天兒屋命の筈を把給へ
ぬ僻事あり然れど次第記ハ靈形筈坐牙像也と有ハ
笑ハ可し衣服ハ皇太子以下親王諸王諸臣五位以
上の礼服朝服ハ牙筈見元聖龜三年二月壬戌初令職
事主典以上把筈其五位以上牙筈散位亦聽把筈六位
以下木筈ハ有る物ハ心得せらるハ何ハ有る事ハ其ハ
の筈を其物ハハ心得せらるハ何ハ有る事ハ其ハ
て其筈ハ當て云ハ何ハ有る事ハ其ハ
有む有ける儲筈字ハ字書ハ筈呼骨及音骨今諱骨膏

日本書紀傳十九

百三十六

爲尺也云云を借たる者にて右の笏拍子の笏ハ折
の義あり辭木折竹の佐久と同一く木を割て拍子の
用ふる謂ある其字義ハ全ハ合ざる者あり借
和名吹ハ拍子俗云百師拍打也打扱樂器名也と有て
其ハ當へべき古言右件御笛御琴笏拍子の起有て又後
ハ無きある可く世御神樂ハ謂ゆる笛工彈琴擊拍子の設備ハれり借
第五十四段徴ハ引れたる神祇本源ハ古語云人長者
天鈿女命也と見えたる如く此時の天鈿女命の所作
ハ一も實ハ後世ハ謂ゆる人長ヒトナガの始あり江次第内侍
所御神樂條ハ時刻出御自額間住袍草鞋云二次御拜兩段
再拜女官引綱鳴鈴次主上遷御圓座云二次人長起行
事先鳴高次名對面次人ニ令起次仰主殿寮御火日奉

仕次仰掃部寮給賦次召和琴其人着賦引之仰云本乃
方候宸上着次召笛本方候次召篳篥末方候次召御歌
本方候又召御歌可奉仕者末方候次云令奉仕次人長
退人ニ皆著座次衛府召人着座次神樂各借陪從五位
笏ニ扱打之次賢木御幣韓神了人長起舞略下と有が如
く御神樂ハ仕奉る長たる者人長とい云あり猶此
同上事を神樂歌次第中先人長庭火乃前仁出来云鳴
高ニニ度次云不留末布ニニニ度今夜乃夜乃御神
態乃人乃長左云ニ天下午壽万歳可御坐支物聞支次
云主殿寮佐ニニニ度則主殿寮佐唯称須仰云御火

白久献礼又唯称須次云男共令立之各乃才可試支
體个申利則自良唯称須次云掃部寮二二度寮人唯
称須仰云膝突給八又寮人唯称須次云御笛可仕支男
召須則笛吹参候膝突天庭火乃笛遠吹了人長仰云
本方仁候八仰云箏篥可仕支男召須同参候膝突庭
火乃笛同前了仰云御琴可仕支男召須琴引参候膝突
之琴仕了奴仰云本座仁候八件三人人長乃年仁隨天
兩方乃座仁著了天引琴之間仁人長仰云笛箏篥與
里安陪止隨天笛箏篥琴與里安波世利次云御歌可仕
支男召須歌人参候膝突庭之笏遠腰仁差之間仁笛箏篥

乃音留了奴琴獨撥久間仁合兩手天為拍子天出音須
云二音留之間仁人長仰云本乃方仁候八立膝突天著
座了奴次末乃歌遠召須同前也仰云末乃方仁侍八次
人長申云男共令立天各乃才試了奴今八御神態可仕
之狀申利則自良唯称了天歸座天著了次始御神態と
有了此迄ハ才試了江次第八幡賀茂等の臨時祭ハ
試樂謂云事有て兼日ハ被行る事有を此ハてハ其
御神樂の場ハ於て先此事有て然後ハ御神事ハ被行
るありけり右の御神態の事を神樂歌裏書あり御前
作法次第ハ次本末乃音頭乃人各笏拍子遠取御神事

遠始年一取物九種神幣杖篠弓劔鉞杓葛但不各雄拍
子九雌拍子十次韓神拍子世次御遊了天酒司二度坏
給云二次前張云二次神舉取物如振と見えたる此人
長の職をしも天鈿女命ハ仕奉る世給へる小あむ有
けねば此等の作法共を以て其古の状をも想像し知
べき事あり然れば神祇本源ハ古語云人長者天
非可き事後の御神態の状を以て此彼思及ぶし知
ぬ可き者あり神事の作法神業の体裁共み悉く此天
石窟の久代始り者あり有けれハ右の支度共悉
互小相通ハして知る者共多かり
ハ相備ハりて次ハ此の本文の猿女君遠祖天鈿女
命則手持茅纏之稍立於天石窟之前巧作俳優亦以天

香山之真坂樹為鬘以蘿為手纏而火處燒覆槽置顯神
明之憑談之有る所の文是あり此を古事記ハ天
受費命手持鬘天香山之天之日影而為鬘天之真折
而手草結天香山之小竹葉而於天之石屋戸伏汗氣而
踏登杵呂許志為神懸而掛出胸乳裏緒忍垂於蕃登也
尔高天原動而八百萬神共咲有ハ此よりハ少一委
曲ハ子狀あり者あり拾遺ハハ又令天鈿女命以真辟
葛為鬘次蘿葛為手纏以竹葉飲想木葉為手草手持著
鐸之矛而於石窟戸前覆槽樽奉庭燎巧作俳優相共歌舞
又見えたり右等の傳を此ハ合せ見れば御紀の此

傳の之全く備はれると云難くして猶意を神ひて
聞へき事少うござる者あり此一應りの事共此の云
ずしての意を盡さざる故に等へし一の此の以て天
香山之真坂樹為鬘以羅為手纏而有天鈿女命の出
立の装束あり其始の在べき事古事記拾遺の如く
無てハ叶はざるあり二の古事記ハ手草結天香山
之小竹葉と有る是あり拾遺ハ以竹葉飲惣木葉為手
草と有る飲惣を木名と為る記傳ハ辨へしはたる
か如く僻事ハ有れども小竹葉を以て手草と為る
事ハ於てハ異り無し三の此ハ手持茅纏之稍立於

公云火處燒覆
槽置

天石窟戸之前巧作俳優拾遺ハ手持著鐸之者而
於石窟戸前覆誓槽琴庭燎巧作俳優相共歌舞と見え
たる方殊々委しく聞ゆ古事記ハ其意の事無きハ傳
漏せりハて不足心ちす又相共歌舞と云事ハ記記共
ハ漏たる傳あるを甚愛なき者あり四の此ハ覆槽
置神明之憑談ハ古事記ハ於天之石窟戸伏汗氣而踊
登杼呂許志為神懸と有る其ハ古文第五十五段徴ハ
引けたる古語拾遺ハ元鎮魂之儀者天鈿女命之貴跡
と所見たるハ此ハ始りる儀式あり其事を傳へ漏
したる者あり五の古事記ハ掛出胸乳裳緒忍笛於

番登也云云文是あり此ハ日神を如何にもして招
出し奉るむ態ハ百萬神等の可笑ハ堪はずして
笑ハむ事を謀り儲けて日神をして怪しませ奉るむ
と為る所あれハ此にてハ甚しき御事あるを御紀ハ
も拾遺ハも傳漏せるありハ右ハ意を補ひて聞へし
とい予此等の事を云るあり 神祇本紀ハ右三書の事
實を取合せて文の次序
を成せり者ハ有れども甘く事意を曉るざる故
ハ中ハ重複れる事も有て正しうさず此ハ神樂
の起りて天兒屋命天太玉命の神事ハ相此びて甚止
事無き傳説あるを此ハ僅ハ正書ハのニ此事有て
一書共ハ其と思めし事ハ一ハ無きハ甚不
足ぬ事あり者あり故下ハ右ハ古事記拾遺をも合
せて一ハ説 ○又ハ上ハ天兒屋命太玉命の事を云て
言為む

下ハ相興致其祈禱焉有る是此の主意ある故ハ其
ハ對へて此の神樂の事を又ハ云るあり○猿女君
の事ハ天孫降臨章第一一書ハ就て注す可し傳三十
一卷 百 ○天鈿女命上 百八 下 ハ註す可し如く天兒
屋命の右神大宮比咩命是あり天孫降臨章第一一書
ハハ思兼神妹萬幡豐秋津姬命と出たるハ共ハ亦名
を以て傳ハれりあるを紀記共ハ此神を天忍穗身尊
の右神と為るハ誤ある事古史第三十七段徴ハ委し
く論つるハ然るを古語拾遺ハ其高皇
產靈神 所生 之女名曰栲幡千千姬命其男名曰天忍日命又

男名曰天太玉命と有て此三柱共高皇產靈神の御
子とハ有れども實ハ此三神ハ天石門別神の御子
ハ御在し坐す事已ハ上二百四ハ云り然るを拾遺ハ
右の栲幡々姫命と天鈿女命とを別神として其出
自を書さす又別ハ大宮賣神と有て下ハ是太玉命久
志備所生マ云ハ誤あり若然も有ハ殿祭門
祭者元太玉命供奉之儀マ云ハ父ハして其御女を
祭ルハマヤ甚信ニ難ク有ハ又其大宮賣神をハ
並ビハ豊磐間戸命柳磐間戸命を是並太玉命之子也
マ有リ此二神ハ古事記ハ天石戸別神の亦名マ有
ハ其太玉命の子マ云ハ有ハ名義ニ説有り又予ハ
ハ共ハ曲説を免ッルハ云ハ有リ

説く所も亦別あり先記傳八四十一ハ古語拾遺ハ天鈿
女命古語天乃於須女其神 強悍猛固故以爲名今俗
強女謂之於須志此縁也マ有ハ此註を思ハハ此書ハ
傳ハハ於受賣マ有ハを鈿女マ書ハ文字ハ書紀ハ依
ルハあり延喜七年進太神宮祓豆譜圖帳ハ此段ハ事
を云ハハ天乃於須女マ有ハ源氏帚木卷ハ例ハ腹
立ち怨ずルハ如此於叙ハハ甚トハ契深クマも
絶マ又見トハ有ハ河海杵ハ形遠文選マ有リ又夕霧
卷ハ人聞ハ轉於受マハハ所業を東屋卷ハ物包
マ爲ス疾リハ於叙ハ人ハ浮舟卷ハ浮舟若ハ川

△といひ蜻蛉巻
子驚くしく於叙
子やうきりて
云し

小身を投むと思寄れる事を云る所少し於受る
可き事を思寄るありけむしあや有る皆婦人の事
を云て右の意なり和名抄の護田鳥於須賣止里常在
澤中見人輒鳴有似守宮故以名之と有る此神名よ
り出たる名ある可し今世言ふも於曾伊又於受伊と
云事有り又賤しき言ふ延受伊と云事有る是より轉
れるある可しと有り此神の强悍猛固の御在し坐す
事ハ記傳にも引水たる此の第三一書ハ是後(素)鳴
尊(中)迺復崩天扇国上詣于天時天鈿女見之而告言於
日神也と有る出向ひ坐す事ハ書はれざれとも然

强悍猛固エハク神カ坐故カ休候カ差され給へるあり
り其ハ猿田彦神の事を天孫降臨章第一一書ハ已而
且降之間先驅者還白有一神居天八連之衢中故特
勅天鈿女曰汝是日勝於人者宣往問之天鈿女乃露其
胸乳抑裳帶於膝下而笑嚔向立下有カ如カ行て目
勝問給へるあや女神カ坐せカ荒益神カも超越カて
勇有る神ハ御在し坐を曉る可し其同ト事を古事記
ハ故尔天照太御神高木神之命以詔天宇受賣命汝
者虽有手弱女人共伊年迦布神面勝神下見元カる
あや彼此思合せて曉る可き者ありカ此事猶下カ
名義を説く

所引合せて心得ハ神樂ハ阿知女云云ハ又此
於受賣ナリ轉レ者ハ右ノ強悍猛固ハ無仁天
皇七年御紀ハ當麻躰速ハ事有勇悍ト云ハ景行天皇二十七年御
人也強カ以能毀角申釣ト云ハ景行天皇二十七年御
紀ハ東夷ノ事ヲ為ス人勇悍ト見元川士鳥師
啓セ名義抄ハ悍ヲ多初志トモ伊佐年トモ毛波良ト
可見元ナリ又予ハ本生國ハとハてハ小兒あトを強
さハ取成一テ卷云又通證ハ鈿女之名取以眞坂樹
為鬘之義拾遺蓋一說耳有テ其引了景行天皇十七
年御紀大御歌ハ多ニ弥許葦幣遇利能夜摩能志羅伽
之餓鳩于受珥左勢許能固ト見元ナリ古事記ハ
倭運命ノ御歌一テ結句字受尔佐勢曾能古ト有リ
又推古天皇十一年御紀ハ頂撮搥如囊而著縁耳唯元

日著鬘華鬘華此見元又十六年唐客を朝廷ハ召給
ふ所ハ是時皇子諸王諸臣悉以金鬘華著頭有リ
此時ハ始て冠ノ制出来ハナリトモ元會ハハ神事
或ハ殊有ル公事ハ猶古ノ鬘華を挿ル者ハ
ウケリ叙述義ハ兼方案之鬘華者鈿也今世挿頭花象
此歟ト云リ和名抄ハ漢語抄云鈿頭花賀佐之俗用挿
頭花ト見元ナリハ万葉一十九ハ春部者花挿頭持秋
立者黄葉頭刺理一云黄葉二三十ハ春部者花折挿頭
秋立者黄葉挿頭八十六ハ憾孀等之頭挿乃多米尔遊
士之纒之多米等云二聞尔鷄類櫻花能丹總日没母安

奈尔又^{三十一}秋^九茅子者盛過乎徒尔頭刺不搖又^{四十}露
霜尔逢有黄葉乎手折来而妹^九抽頭都^十抹手打吾
刺可花開鴨^{十四}吾皆子之抽頭之茅子尔^{十三}
水枝指秋赤葉云^三公之頭刺^{二十六}春去者抽
頭尔將為跡戎念之櫻花者^{十八}安之比奇能夜
麻能許奴礼能保典等里天可射之都良久波^{十九}
始花乎折而抽頭奈又君尔於是相抽頭都流波疑^二
^{十一}夜麻天伎波奈溼都^二於保佐牟安里都^二母
伎美伎麻之都^二可賦之多里家利^二有^三抽頭^二右
の警華の類あれども既く推古天皇御代より木枝又

ハ時花を頭抽す事ハ止て金銀あを以て作れるを
抽す事ハ成れるが故ハ警華と抽頭とを別物の如く
心得る事ハ至れども猶万葉の^{十三}五^十串
立神酒 座奉神主部之雲聚玉蔭見者^{文十九}
小島山尔照在攝字受尔左之仕奉者卿大夫等^云
事も有しあり俗名義抄ハ鈿を加祢能波那と有ハ説
文ハ金華也と有ハ出たる訓ハて此の古義ハ非ず
又加牟邪志と有ハ右ハ云る抽頭花の訓ハ同トナレ
ども上代の警華ハ當りぬ字あれハ此鈿字を用ひ
るハなりとて其義ハ取成して此天鈿女命の鈿を警

△警華の事ハ下
三百九十三丁中云々
如紀記拾遺ハ
漏たれども
不を以て御稱給
へりしと思ふ
然りとて

華の意ハ一定の難き事ナレバ此通證の説ハ取用
可ハ非ズト雖も思惑ふくむ人の爲メ今ハ警華の事
を云ふのこアリ 其△此時の天鈿女命の御裝束ハ
御鬘有り御宇纏有り又御箱有ハ
何を以ても御名ハ稱ウ可キ狀アリトモ此時カ神等
ハ然ル形容を以て負給ヘルハ無ク皆行事ハ依テ御
名ト爲スルのこアリハ御名ハ如何ハ定め玉例の推量
以て警華ハ依ル御名ハ如何ハ定め玉例の推量
過ざるアリ故又思ふハ天鈿女命の宇受賣を神樂ハ
ハ阿知サマ有り太神宮祢回譜圖帳ハ於須女
見えたりを亦名を大宮比咩命ト申す事も有ハ合セ
考ふるハ右の阿も宇も於も共ハ大字の義あり可
然して受ハ巢ハて宮室を云ふ古名ある事傳十八
十五

丁ハ云るか如ク古事記国過段ハ唯僕住所者如天神
御子之天津日繼所知之登陀流天之御巢而於底津石
根宮柱布斗斯理於高天原氷木多迦斯理而治賜者ト
有ハ其玉垣宮殿有同ト大神ハ御諭ハ修理我宮如
天皇御舎者云ニマ所見たるハ別あり 其任所の事
ヲ其任所の事ヲ其任所の事ヲ其任所の事 御舎ハ
當テ御巢ト宣ヘリ又其天御饗殿ハ於出雲国之多藝
志之小瀨造天之御舎而ト有テ下ハ是我所燈火者於
高天原者神産巢日御祖命之登陀流天之新巢之疑烟
之八拳無摩豆燒拳云ニマ有テ天之御舎ト天之新巢
ト並ハ對たるアリ是あり凡巢ト云ハ鳥虫ありハ限

此の事スミカの如く思ふ事あれども人亦も任スミと云ひ任所
 云るハスミカ巢群あり巢群處あり右引り御舎の事を
 御巢新巢と云ハ何れのも近き證ある上ハ鈿スミハ本
 り借字ありて大宮の事ありけり然てころ古語拾遺ハ
 爰令天子力雄神引啓其扉遷座新殿略中令大宮賣神侍
 於御前下有ハ打合て大宮女命の義あり正スミ一スミ叶
 ハりけり猶上引り知名枚スミ護田鳥於須賣止里常
 在スミ沃中見人輒鳴有似主守宮故以名之スミ有ハ鳥名ハ
 然スミる神名を負する事ハ大宮を主守スミるせ給へる其神
 の狀ハ似たりスミか故ハ於須賣スミと云るスミにて強悍猛固

の謂ハ依りるハ非スミるあり然スミ拾遺ハ其神強悍
 猛固故以為スミ名今俗強女謂之於須賣志此縁也と云る
 説ハ立スミさるスミと云ハ然スミハ非スミず此神の大宮を主守スミ
 せ給ハ素スミより強悍猛固ハ御在スミ坐スミか故ハ有け
 此ハ其事スミハ就スミて強女を於須志スミと云称スミハも用ハたり
 一者スミと為スミハ疑スミハ勿スミる可スミくスミと云スミ又大殿祭詞スミ別スミハ所見
 ハ異スミハりて豊受大神スミの亦名スミハ御在スミ坐スミ事スミ上スミ六スミ十スミ丁
 ハ己スミハり其大宮賣命スミの賣スミハ日夜見尊綿津見神スミハ
 ぞ見スミハ同スミトスミて大宮をスミ持スミちスミ所スミ知スミ者スミ田スミありスミ若
 て天スミ鈿スミ女命スミの亦名スミハ賣スミハスミの義スミあり事スミ大宮スミ北
 咩命スミも申スミすスミハ准スミるスミハ知スミハスミ此スミハ唯スミ天スミ照スミ太スミ神スミハ大
 宮スミハ供奉スミり給スミへるスミハ姫神スミと申スミさスミハスミ如スミハスミ猶スミ此スミハ神スミハ御
 功スミハ御事スミありスミ次スミハスミ説スミ行スミくスミをスミ以スミてスミ見スミるスミ可スミくスミ又スミ傳
 二十スミ二スミ卷スミハ其御名スミの出スミたるスミ下スミハ委スミくスミ注スミすスミ可スミあスミむ

今第一書小謂ゆる
日序の事あり傳三
十六行中云一宿茅
經一と云云書意

○茅纏之稍公私記小以茅纏其牙也と有か如し但必
以茅者蓋取潔白之義歟と云れども然る意ハ非ず
必妖氣を攘ひて神庭を淨むるあり可し茅ハ菅の種
美ありが故小万葉三四十天有左佐羅能小野之七
相菅乎取持而久堅之天川原尔出立而潔身而麻之字
マ有る其菅をハ十六一三十天尔有哉神樂良能小
野尔茅草芥云ニ見え又通證ハ夏越被菅貫輪或謂
之茅輪則菅與茅其用同矣マ云ると然る言ハて其攘
ひて潔出ハる由を以て菅を須賀マ云ハ又其攘ハ小
依て諸の穢惡ケカウいしき事共の散ハひ亡マを以て茅を

今第二書小野
者探五百箇野葛
半玉藏之有を口
訣ハ野葛者茅也
と有る是あり

ハ知マハ云るある可し和名抄ハ菅和名須計草名也
と見え茅一名白羽草和名智マ出たり陸機説ハ菅似
茅而滑無毛者
之云ハ茅ハ一ハ白茅マも云るを時珍説ハ夏花者
為茅秋花者為菅と云る共ハ同種異品あり者あり上
三百二十九下ハ引了本朝事始和琴の事を云る所ハ
茅以須雅乃葉左右乃午奏云て有須賀加幾ハ調と有
て如此ハ茅と菅とを左右の午ハ持て搔撫と云も菅
搔と云ハ菅琴マハ云れども茅搔茅琴とハ云ざるを
以て菅の種屬ハ茅公神武天皇御紀ハ茅濤此云智怒
と見え顯宗天皇御紀詰の御詞ハ倭者彼ニ茅原茂茅
原云ニと宣ハ万葉十二二十ハ茂茅原茅生尔足踏十
六三十ハ茅草芥草芥濤可尔と有ハ如く茅と云ハ
マ事あり然るハ崇神天皇七年御紀ハ神茂茅原と有

八更あり古事記

白橋原宮殿あり

高佐土野も高浅茅野あり可し又顯宗天皇元年御紀
 大御歌の阿佐臧歎囉鳴贈祿鳴復擬と有あり始て多
 く浅茅と云事常めて唯茅とめと云ハ希とあり事あ
 り万葉三十三ハ浅茅原曲二二物念者六十七ハ不欲
 見野乃浅茅押靡七十六ハ印南野乃浅茅之上ハ
 一 野邊能浅茅曾色付尔来又五十七 松影乃浅茅之上
 乃十十一ハ春日野之浅茅之上尔又四十 吾屋前之浅
 茅之本又四十四 吾門乃浅茅何浦葉又吾門之浅茅色就

△浅茅之花乃散
△見者又三十一

又四十四 吾屋戸之浅茅色付十一十一ハ朝茅原ハ野印結
 又三十三 浅茅原刈標刺而十二二十ハ浅茅原ハ野尔標
 結又九十三 春日野之浅茅之原尔あど有て唯茅とめと
 云て置しうる可き事を殊更ハ浅茅と云ハ凡て斯る
 青草あやハ芽生の項の潔清くして美麗ハ物あり
 けハ美稱て其秋ハ成て色着く程あども野生ある
 ハ然云ふ事あて己ハ刈取と物ハ用あハ浅茅と
 ハ云ぬ事ありけり古事記日代宮段の文ハ於其ハ
 竹之所杖云ニて云るを歌ハ阿佐土怒汲良と詠た
 る阿佐も其例あり万葉十一十四ハも神南備能浅小

竹原乃之之事も所見たり一借右の引る万葉八卷三十
 ねが正しくハ茅之花と云ハ心さ其十九丁ハ茅花後
 淺茅之原乃又二十丁ハ茅花子虽喫強瘦尔夜須
 有ふ都ハ後世歌詞ハ都婆奈マ詠テ右等ハ茅を
 下ハ柔を奉て云云ハ音の轉ハ花云意ハ非ガ上三百八
 其形容ハ依れる名云ふ義都婆那ハ字も茅針と書て
 り思ハ混ふ可うはす借此茅纏之稍の事を口訣ハ以
 茅纏柄也云るハ右ハ引る私記の説ハ出たる事ハ
 ハ有ぬとも事の状を思ふハ唯柄ハの纏たるハハ
 有べうらず今世ハ端午節ハ用ふハ糺マ云物ハ如く
 本の方より巻及おして末を乱して彼米配あどの
 状ハ物して其稍鋒を打振て妖氣を避る神熊ハ行

ハけり無名抄ハ業
 早の中將ハ家ハ云ハ
 柱マとも常ハハハ
 茅纏柱ト云物
 少侍ハ何
 項ハ所作ハ
 後ハ例ハ柱ハ
 削成ハ侍
 削ハ云ハ有ハ
 削採ハ厚クハ
 茅を纏ハカハ
 見えハケルハ
 多ハ借

ハつとも日神の御心を取申し給ひけるあり名義杖
 ハ糺字を知麻使と訓れたるハ彼ハ糺マ云ハ餅ハ我
 ハ知麻使ハ似たる故ある可う玉を和名杖ハ風
 土記云糺亦作糺和名知蒿木以菰葉裏米以灰汁煮之
 令爛熟也五月五日啖之有ハ如く古人も外ハ當ハ
 日字の無うハ糺字ハ借たる者ハ西戎ハ云ハ糺ハ
 右の如く菰葉を以て裏マハ菰卷ハころハ有ハ
 我ハ茅卷ハハ實ハ異ハ物ハ以正月の餅を鏡ハ
 象どり又柳枝ハハ貫並ハ玉ハ象どり三月の
 菱形あるハ劔ハ五月の茅纏ハハ稍ハ圖ハ作未

軍所令茅稍裁
 解者三尺茅也
 稍者三尺茅也
 有但字ハ然不
 以ハ丈天の如き
 施可くす

此古の習俗ありけむを彼小似たる事の有れば
 て如何ふか其の擬へるとハ云む然れば此餅の茅纏
 を以ても上代の茅纏之稍ハ形容を考ふる可足て
 通證ハ引る五経通義ハ東夷之樂持茅而舞
 者ある可し備公事根源の古の風儀を聞傳へたり
 小華有り昔高辛氏の惡子五月五日舟に乗て海を
 渡りし時暴風吹ひ浪を沈けしを以て舟神と成て
 人を惱めす或人五色の糸を持て糶をして海中に投
 入しうハ五色の蛟龍と成りし時又ハ屈原が汨羅
 沈み其腹に華せしを祭りし時供物ありとも高辛
 也と有ハ情識ハ過て僻事爲りし者あり高辛
 氏の事詳ある皇大御國ハ事ハ齊諧記ハ出たりとも外
 國ハ知す我が皇大御國ハ事ハ齊諧記ハ出たりとも外
 備ふと云理有るや予ハ心ハ其外國の糶ありとも
 此の神代の遺風ハ此の彼ハ傳ハるや其外國の糶ありとも
 此の糶の事迄を此の云むハ由無き事ありとも糶の因

大膳職式下
 五月五日節糶
 糶糶米云三音
 白十一圖云三音
 著録之茅有
 其

中驚うハ借又上一百六十云云ハ如く古語拾遺ハ
 置ありハ借又上一百六十云云ハ如く古語拾遺ハ
 此を始ハ今午置帆頁彦狹知神云ニ作御笠及房角
 又有ハ其柄ハ此二神の作給へるあり又此茅一
 書ハ以石凝婉為治工採天香山之金以作日矛と有ハ
 此矛の鋒を令造給へるあり又拾遺ハ令天目一箇神
 作雜刀斧及鐵鐸古語佐マ有ハ此茅纏之稍ハ著た
 鐵釘ハ其神の造給へるあり其茅ハ此の第一一書
 小野槌者採五百箇野篁八十玉藏と見えたり其屬ハ
 可くして此を日矛とも申す程の御事ありければ
 甚止事無き神財ハ有ける借其鐵釘を古語佐

當時奉^レ無^レ親^レ祭
 料物^ハ鈴^ニ二十^口俵^ニ
 使^テ二十^口有^レを^以て
 此時^ノ茅^繩之^箱
 即^チ著^レ銀^之茅^也
 事^ト知^ルる^ハ佐^夜

那伎^ヲ注^セせる^ハ亮^{カヤ}鳴^キの^義而^テ亮^{カヤ}の^音の^清亮^{カヤ}ある^ヲを
 云^フあり^ク古^事記^明宮^段歌^ハ布^由紀^能須^加良^賀志^多紀
 能^佐夜^ニこ^ト有^ル如^ク冬^木柯^之下^木之^亮ニ^ハて^冬枯
 の^木葉^ノの^鳴音^ハ云^フあり^ク又^レ此^ノ同^ノ天^皇三^十一^年御^紀ハ
 枯^野松^ノの^餘燼^ヲを^天皇^冥以^テ令^作琴^其音^鏗鏘^而遠^聆之^也
 有^レ其^大御^歌ハ^那豆^能紀^能佐^柳佐^柳之^謠ハ^世給^以
 又^レ仁^德天^皇三^十八^年御^紀ハ^有聞^鹿鳴^其 壹^窻亮^而
 悲^之而^是あり^然ハ^鐵銀^を佐^那伎^と云^ハ其^鳴音^を
 取^テ号^けた^る而^テ即^チ鈴^を云^フあり^ク記^傳八^卷ハ^右
 此^ノ書^紀ハ^謂ゆる^日也^此料^ハ作^ルる^ハ可^ク或^レ説^ハ
 以^テ日^御像^為日^前天^神以^テ日^前為^國懸^大神^と云^フ又

其^國懸^大神^ノ相^殿ハ^天鈿^女坐^ル云^フ所^由有^ル事^{あり}
 あり^けり^斯ハ^日矛^と云^フ茅^繩之^箱云^フ著^レ鐸^之
 矛^と云^フハ^唯名^ノ傳^ハ異^{あり}る^ハ之^ハ也^也此^ノ天^鈿
 女^坐ノ^持る^矛あり^ク云^フハ^實ハ^然る^説あり^ク
 有^レけ^ル○天^石窟^之前^ハ古^語拾^遺ハ^石窟^戸前^と有^レ
 天^字を^省き^古事^記ハ^唯ハ^於天^之石^屋戸^伏汗^氣マ
 有^ルハ^言足^ハず^前ハ^戸前^と云^フ事^ハ也^即天^石窟^ノ戸^外
 を^云あり^ク右^ノ手^カ雄^神ハ^立磐^戸之^側マ^有る^戸掖^ハ
 並^ベ對^シり^ねたり^前ノ^例ハ^天孫^降臨^章ハ^孰て^奉べ^シ
 傳^三十^見る^可シ^海宮^遊行^章ハ^門前^有一^井ニ^上有^湯
 云^フ古^事記^同段^ハ其^神之^御門^有傍^之井^上有^湯
 津^香木^云若^人有^門外^或云^フ見^えて^門前^を門^外
 を^思ふ^可シ^巧ハ^年組^ハて^上匠^を手^人あり^ク云^フ

○日本書紀傳十九

○三百五十二

職員令ハ工部
之見又又性代
録ハ工部有リ
備

手是あり組ハ疑之同トク其伎ヲ思を凝一心をモラ
為ニ謂あり二十降ハ云云カ知ク第一書ハ治工を名久美ヲ訓ハ工ノ義アリ天孫降臨章第一書ハ天目一箇神為作
金者カクミと有ハ金工カナタクミと云事ハ雄略天皇十二年御紀ハ
木工コカクミ云事の有對あり和名抄ハ木工寮を古多
久美乃豆加佐と云ハ右の時の秦酒公歌ハ伊比
志抱俱弥幡夜阿抱羅陀俱弥幡夜と有ハ世ハ多き
者ありハ打任せてハ木工を多久美と云一ありけり
又同抄ハ鑿治病工也と云ハ相人を相工と書一鍛
冶陶者をも其部ハ枚ハ商人ハ對へて工人の稱有て
其工を和名太久美と出たハ自餘ハ百工をも共ハ

工と云るあり然ハ舞伎衆人の類も右と同トク工
の部ある事知る備此ハ巧作俳優と有る巧字ハ謂
ゆる巧言令色あどハ巧ハ同トクハ意を用ひて
聞へきふや右ハ云る手組の義ハ神武天皇御紀末目
歌の下ハ今樂府奏此歌者猶有手量大小及奇色臣細
此古之遺式也と記させ給へる其ハ等しく舞ハ手
限を盡させ給へるを云あり然ハ巧言あどハ手伎あ
るある可一備今も舞伎あどハ其標を仕格ハ借て用ふ
たるを仕組と云る組も亦手組の組ハ同トク作俳優
優ウキの下ハ古語拾遺ハ相共歌舞と有ハ然ハ事ハ
右三三百三ハ云云カ如ク此時ハ天鈿女命ハ神樂の人
十七三下

長小御在し坐けり此場小侍給ふ八百萬神を率て
共小歌儻小仕奉給ひけむ事次小云を見て知べし備
此小態招之態嘆との二説有り共小態之ハ神業盡目
歌小伊加波加利共支和佐志天加阿万天留也此苗女
乃加見字志波志止ニ女年志波志止ニ女年と有之和
佐小て其ハ神態の事あり神樂歌次第小先人長長火
乃前仁出来云鳴高ニニ度次云不苗末ニニニニ
ニ今夜乃夜乃御神態乃人乃長左云ニ次人長申云男
共令立天各乃才試了奴今ハ御神態可仕之状申多則
自良唯祢了天帰座天著了次始御神態見元其裏書

ハ音頭乃人各笏拍子遠取御神事遠始年と有之次
小一取物九種神幣杖篠弓劔鉾拍葛用葛各雄拍子九
雌拍子十次鞞神拍子廿次御遊了天酒司度坏給則了
次舞仕略之有て御遊即御神態ありあり内侍所御神
樂次第ハ人長起舞之有之是あり其ハ海宮遊行章
法我者吾生児八十連属不離汝之垣邊當為排優之氏
也之有之其第四一書ハ從今以往吾子孫八十連属
但當為汝排人に見えたる排人を知邪畏登と訓之又
其之古事記ハ故至今其溺時之種ニ之態不絶仕奉
也之云其態ハ職員令集人司ハ掌檢較集人乃名
帳教習歌儻と有て即歌儻の事あるを併せ考ふ可き
者あり態招の招ハ上九百五十小云之カ如く此第一ノ一
書小宜圖造彼神之象而奉招禱也之有ハ古事記ハ謂

ゆる遠岐斯を造りて招禱^{ヲケ}し奉る玉とあり其日像之
鏡又八坂瓊曲玉を遠岐斯と云ハ招禱實と云事ハて
日神の御璽を招 寄せ奉る料ハ造れるあり又上ハ
天兒屋命太玉命の相共致其祈禱為と有ハ第三一書
ハ天兒屋命則以神祝之又第三一書ハ於是天兒屋
命握天香山之真坂木而云ニ乃使忘部首遠祖太玉命
執取而廣厚祢辭祈啓矣^略下有ハ此ハ廣厚祢辭祈啓
して日神を招禱奉れるあり然るハ此天鈿女命の相
共ハ歌舞給へるハ私記ハ諸神欲令日神深見奇物故
俳優万態不可殫記と有カ如く深く奇異ハ申せ奉る

ハカ為ハ然る戲ハれたる可笑ハ其態を成して日神
を誘^{ツキツル}出し奉る玉と巧ニたりハ者あり然ハ物を以
て招禱奉れるハ遠岐斯と云ハ言を以て招禱奉れる
ハ祈禱^{イナリ}と云ハども例を以て思ふハ言招^{コトヲキ}とも必云フ
可キ語格あり借此ハ歌儻の態を為して招禱奉れる
ありハ態招^{ツキツル}ハて有ハ事云も更あり但此の俳優ハ
日神を招奉る態を為し給へるありハ本より態招^{ツキツル}の
義ハて聞ゆるを右ハも引る海宮遊行章第八一書ハ
る火酢芥命の言ハ當為俳優之民也と有ハ態招の義
と説てハ通ゆまハまカ如くありども然ハ非ず其文

小故兄知弟德欲自伏辜而弟有愠色不與共言於是兄
 著犢鼻以赭塗掌塗面告其弟曰吾汚身如此永為汝俳
 優者乃蹙足蹈行學其溺苦之狀初潮漬足時為足白至
 膝時拳足至股時則走迴至腰時則捫腰至腋時則置手
 於胸至頸時則拳手飄掌自尔及今曾無廢絶と有る此
 も兄の伏辜ひあむと為しうとも弟尊の愠色ひ給ひ
 し故に與共言をも為給はざりしゆ其溺苦しめり
 し状を擬ひて其弟尊の近着き奉らむと為らねたる
 あり此も同く態招の義ひ於て少くも異ありば
 るあと思合す可き者ありし
 又誘字を神武天皇御
 紀の表許豆流と訓る

ハ俗ハ詐引出す云事あり其曾昆久の曾ハ虚りて
 實ありぬ事と成しつとも其を實と思せしめ奉ら
 む謀りし者あり此の態招も日神をして怪しませ奉ら
 む招致高態也云り然る言あり偕此俳優の字ハ叙
 言家語曰齊奏宮中之樂優倡俳優舞干前又列女傳曰
 夏桀求四方美人積之後宮於俳優舞干前又列女傳曰
 難於房造爛熳之樂見通證ハも礼樂記註曰俳優
 ハ有れども右等ハ然し態招の事ありば此字の據ハ
 聞えず又一説俳優を態咲と云ハ袁加志ハ古事
 記ハ此時の事を為神懸而掛出胸乳裳緒忍並於蕃登
 世故高天原動而八百萬神共咲と有る如く人の耻て
 得為りし事成して八百萬神ハ笑ハしめて日神
 ハ奇しませ奉らむと巧めりし者あり袁加志の言ハ

古事記明宮段大御歌の和賀許ニ呂志伊夜袁許迹斯
王伊麻叙久夜斯岐と有る袁許を御紀の皇太子の
御歌として于古と見えたるハ空心の義あり是あり
其を神武天皇御紀の皇軍大悦仰天而咲固歌之曰
有て伊菴波豫伊菴波豫阿ニ時夜鳩云ニ見えたる
ハ叙ハ阿ニ私記曰咲也時夜鳩私記曰猶言字加志
と有る字加志ハ右の鳩の一言を注せるハて空と云
むカ如し其時夜ハ其也ハて中古の文辞ハ多ク詞不
り然るを古事記ハ疊ニ志夜胡志夜此者伊其能布
曾阿ニ志夜胡志夜此者嘲笑者也と有る此ニの志夜

胡志夜ハ其也可笑也ハて皇軍の大悦びて嘲笑ふ
事あるを袁加志夜の袁を略ける者ハて紀記共ハ其
義然しも異らざる者あり新撰字鏡ハ可笑見醜貌阿
奈字加之と有る如く袁加志ハ見醜貌と有る其意ハ
て他の袁許ある振舞を見て自笑ふ事の頻ある意ハ
り又自の心ハ嬉しくて貌ハ袁ハれたるを他より見
ても云語ハて褒る方ハも貶しむる方ハも云ハ物
を見て笑ふ事ハ然して異りも非るか故ハ共ハ袁許
とも袁加志とも云ふり借口詠ハ俳優者戯倡也と云
ハ通證ハも謂之猿樂者猿女氏所相傳之樂也とも有

△又名或秋不可味
 △表加志何都表加
 △志之見え何吹を
 △表加志者有リ字鏡
 △集字群を表加志
 △久有も同言ある
 △可
 △有リ体源秋
 △載る異本古語
 △本方天見屋根年
 △末方太玉命人長
 △天鈿女命と云事
 △其の有

か如く咲ひを諸神の取むとて甚く戯ふれ給ひて我
 りも非ず甚く洒落^{シバ}給ひけるを以て態^{ワサ}咲の義を取
 るも其謂れ有る事あり故思ふに其事の態招の義
 状の態^態咲の意めて各出所ハ異ある言ありし打
 合て俳優の事を云ふ一種の名ハ成れる者あるハ
 ころ又右の表加志を舊事紀ハ人興^{ウカ}と作り中古の
 書ハ表許^{マカ}と表許^{マカ}賀麻志^{マカ}と有り文選ハ徑
 迄の字を表許^{マカ}賀麻志^{マカ}と訓たるを許^{マカ}ハ過度之意又云
 激過也^{マカ}有るも物の甚しきハ過る意めて合ハ
 ○巧作俳優ハ相次て古語拾遺ハ相共歌舞と有ハ右
 の云るか如く天鈿女命を人長として外ハ笛生彈琴
 擊拍子ありし仕奉る神等を除てハ諸神等も相共ハ

△古事記ハ諸神
 △事共ハ舞ハ
 △無ハ天字
 △命の事ハ就て高
 △天原動ハ百万神
 △共咲於是天照太神
 △以為怪細用天原
 △戸内活者四五
 △而以為天原自
 △其原中国皆
 △何由以天字受
 △者有業亦ハ百万神
 △諸咲ハ有を以見
 △ハ共ハ百万神
 △給ハ事知る又
 △格遣の

歌舞ハ仕奉るハありけり△崇神天皇段ハ仍就於
 倭^{ヤマト}笠縫色殊立磯城神籬奉遷天照太神及草薙劍令皇
 女豐鍬入姬命奉斎^其鳥共遷祭之々宮人皆參終夜宴樂
 歌曰美夜比登能於保共須我良尔伊佐登保志由伎能
 興呂志茂於保共須我良尔今俗歌曰美夜比止^乃於保
 伎乃共保志茂於保共^其曾許侶茂比佐止保志由
 曾許侶茂詞之轉也^其有る此歌神樂譜ハも出たる
 ハ此ハ其場ハ侍るハ宮人等皆共ハ終宵宴樂ハける
 あり思合す可し其後世神事ハ遺傳ハハハ一二例を
 今奉むハ鎮魂祭儀ハ御巫西復宇氣槽立其上以楯撞
 禮^レ毎一度畢伯結木綿鬘訖御巫舞訖次御巫猿女舞訖

次宮内巫一人次侍從二人次内舎人二人次大舎人二
 人舞訖復本座見えて衆共舞事有り又太神宮
 式三時祭條小斎内親王并衆宮以下再拜拍八周手次
 拍短手再拜如此兩遍略訖入外玉垣門供倭儂先神宮
 司次祢宜次大内人次幣帛使次斎宮主神次寮允以上
 一人酒立女一人持拍一人持酒每儂了人令飲拍酒但
 之時用祢宜次祢宜大内人妻訖斎宮女孺四人供五節
 儂次鳥名子儂見元内侍所御神樂次第小人皆
 著座次衛府召人着座次神樂各借陪從五位笏二枚打
 之次賢木御幣韓神了人長起舞云二次人長起召才男

数人一進奉仕畢人長退次左并八利次星次朝倉地
 下陪從歌次其駒次人長起舞略あども有て此侍小
 恨の人とも相共歌儂の事仕奉れ趣あるを以
 て拾遺巧作能優相共歌舞と有共八百万神の
 所作小巨文あるを考合す可き者あり但内侍
 樂の事儀式も式も載り江次第始見
 元たる自一條御時始二月有御神樂と見え
 事根源ハ此御神樂一條院の御時より始まる隔
 年ハ行ハる兼保り行ハる年ハ成りけり
 有り又十一月下西賀茂臨時祭條ハ此祭の起り賀茂
 多の帝未王侍從と甲奉り給ひける賀茂
 大明神現ト給ひて臨時祭を給ふ可き由申さるけり
 小我然也事知侍了御門へ申さる給ひける
 程無くして思食も寄ぬ位即せ給ひける賀茂元

○日本書紀傳十九

○三百五十九

年十一月より臨時祭を奉る也給ふと見え又三月甲
 午日石清水臨時祭條々天慶五年四月廿七日始て此
 臨時祭の有さ此の過り年將門の逆亂の事有し時
 祈中さゆけり云々其報賽の爲に臨時の祭を奉ら
 ざる事あり其の臨時祭共御神樂の式を以て行
 此神世の故事を傳はる者あり○猿樂と云事の
 有けぬ儀式作法猶古の如くあり
 起りしは必此時の俳優の起り事右に引る通證ハ
 謂之猿樂者猿女氏所相傳之樂也と有か如く本朝事
 始ハ狹流樂高砂景行天皇二年始但号狹
 流樂者以狹流篠舞之謬也但今号篠者狹流篠之略也
 神樂而令津太神之神殿上古者以狹流篠奉幣縁而自
 神世之樂也と見えたるハ心得難き事あが今此を

注一試三玉ハ先高砂ハ催馬樂律の高砂と云有る
 是あり可一逃松ハ今傳ハる譜ハ見えたるハ絶たり
 けるハこり狹流ハ猿女君の猿ハて戲ハる義あり可
 篠ハ草ハ採り多あり草結天香山之小竹葉而於
 天之石屋戸伏汗氣而踏登持呂許志と見え拾遺ハ以
 竹葉飲飲想木葉爲草今多持著銀之矛と見えたれ
 此ハ謂ゆる茅纏之稍ハ取副て舞給ひし物ハ事下
 四百十ハ云るか如く神樂採物歌ハ篠本古乃佐ニ波
 伊津古乃佐ニ曾安母仁万須止與遠賀比女乃美也乃
 美佐ニ曾美也乃美左ニ曾
三句以下梁莖愚案概体源
 概作止祢利良加古之仁左

加礼苗止毛乎加乃佐末佐二和伏波曾天古曾也礼女
止祢賀波乃伊志波布無止毛伊佐賀波良典里伊佐加
波良典里又有了此篠を以て舞ふ故に戲篠舞と云ふ
あり可し然るに今号篠者狹流篠之略也と云事心得
ず篠ハ物名あり狹流ハ戲ハて所作ありハ今号篠樂
者狹流篠舞之略也と無^レハ聞えぬ文あり神樂而
今津太神之神殿之有ハ謂ハ有る事あり其ハ篠葉を
打振^ル事ハ其戲遊中ハも炊氣を攘ふ所作ありハ
也神樂譜ハ前張^{サイハリ}と云有り歌ハ佐伊波里仁古呂毛波
所女无云^{サイハリ}ニ有^{サイハリ}ハ初萩^{サイハリ}尔衣者將深^{サイハリ}マ云事あり其ハ

依て一曲の惣名と成れる如誰しも思たれども如
何ハ然る事ハ在む神樂酒殿歌ハ奈加止美乃安末乃
古須氣乎佐紀波良比伊能利志古登波云ニ有る佐
紀波良比ハて即割^{サキ}拂^{ハラヒ}あり大被詞ハ天津菅曾^{サキ}本
折断末折切^{サキ}ハ針^{サキ}取^{サキ}辭^{サキ}ハ有る是ハて俗ハ采配
と云物の如く草を束ねて本を結ひ束を乱して草
ハ為るを打扱^{サキ}て舞ふ曲名あるガ故ハ前張^{サイハリ}と云ハ
リ故神樂神歌ハ加良乎伎世武也ハ空招ハ萩葉を
兼^{サキ}ハる由上^{サキ}百五十^{サキ}ハ云るガ如く又其前張^{サイハリ}の曲の中
ハ難波方ハ葦^{サキ}ハ寄^{サキ}有^{サキ}ぬ可く木綿志天の歌ハ伊奈乃

野屋
 △多志川夜
 已加万毛天加
 於此年夜已須か
 二有

保乃有り階シカカリ香取カ井名乃不志波良之有る井名ハ
 地名不志波良ハ柴原アヒハラあり薦枕ハ水草の菰コ寄て
 譜を成たるあり志都夜乃小菅ハ賊屋之小菅あり篠
 波ハ右ハ云る手草の小竹あり殖シ香歌ハ安左知阿波良耳了訓
 入たるハ淺茅あり右ハ如く其物ハ寄せて他ノ事を
 詠入て譜ハ成しつれども葦稻穂柴薦小菅篠淺茅
 などを本ハ手草の如く成たりけむうくの事之見内
 ねハ其物を採て立舞ふハ即秋氣を避け不淨を攘ふ
 術ありしハ故ハ今津イ太神之神殿ニハ傳へたりし者
 又ころ見えたりけれ但レ己レ採物ノ所作ハ亡ありし者

下三百八十八
 三張の説ハ
 合せ考ハ可事
 あり

唯歌詞ハの遺レるあり賀茂翁ノ神遊考ハ体源
 狹院御時ハ神樂譜ハ昔ハ眞觀御時ハ神樂之ハ日ハ被レ撰定云ニ次朱
 ハ古ハ教多ハ神遊ハ詠ハ眞觀ハ其宜ハ其後延喜ハ御時ハけむ
 此を後ハ神樂譜ハ云ハある可ハ其後延喜ハ御時ハけむ
 ハ去り或ハ詠ハ替ハへりハ其採物ハ隠レたりハ葦ハ難
 波方ハ云ハひ柴ハ階香取ハ云ハ事ハ成ハりハ然
 手草共ハを以てハ妖氣ハを拂ハふハ古ハ禁方ハの世ハ知
 ねず成ハけ右ハ云ハる狹流ハの戲ハある事ハの田ハ古事記
 小謂ゆる掛出胸乳裳緒忍ハ並ハ於ハ蕃登也ハ有ハ更ハあり
 催馬樂ハ陰名ハ云ハ有ハり譜ハ久保乃各手波奈尔止
 加伊布久保乃各手波奈尔止加伊布都良太利ハ不
 奈布大毛呂八日乃奈加乃比津支女ハ不ハ久奈宇大毛

呂。云も有り宇治拾遺物語五五堀川院御時内侍
 所御神樂の夜職事家綱を召て今夜珍珍しうしむ申申
 樂仕三了奉りて仰事有り奉りて第第の行綱を托寄せ
 て仰事の候へ家綱か思思ふ様有り庭火白く焼たる
 の袴高く引上て細脛を出して云云この態して八むと
 思ふ如何ゆと云へ行綱然も有るむ然有ども公
 の御前ゆて便無くいと云けぬ家綱諾ありて黙黙
 頭頭殿上ゆ何事や為為むずと待せ給ふ家綱
 出て然せる事無様ゆて入ゆけり又又斎て行綱召す
 と云へ實實の寒げある気色をして膝膝を股まで搔上

今藤原明衡主新
 後樂記ゆ上下齒
 欽落若飼様顔
 左右乳下坐似更半
 謂云謂附大而如
 横江梁鷹高而似
 戴冠蓋長寸太
 四伏紐結附髪大如
 珠不付帶纏筋
 珠如玳瑁玳行剛
 如栗木珠堅如鐵
 敗奈曉茶茶狂
 言綺語を記さる
 申業然了戯たり
 事あり致るゆり

て細脛を出し戰栗戰栗き寒けある色して寄寄二二夜の更
 て去去ゆ寒寒ま小振ち小陰囊を歩歩ちふ笑笑むと云て
 庭上を十二三度許 巡りて入ゆけり上中下大抵動
 こけり家綱謀謀るゆたる憎けぬも兄弟の中違ふ
 可くも非ずとて有有し小易易さゆけり有あるどの如
 き嗚呼ある事を成すゆ由て猿樂猿樂ハ云る者あり此
 十訓抄七巻ゆ堀川院御時兄弟ゆて家綱行綱と云
 小陪従有りけり無雙の猿樂共あり云云こ有り陪従陪
 八人長を主として其其小陪従へる由由聞ゆ内侍所御
 神樂次第ゆ定召人殿上陪従六人地下加陪従六人諸
 衛召人八人有る儲粟田口猿樂記ハ抑猿樂と申す
 此召人を云るあり儲粟田口猿樂記ハ抑猿樂と申す
 事を皆人狂言綺語の戯戯との思へり然る小神道の

隨一して侍る其原を申さば太神岩屋戸の引籠り世
 給ひし時八百万神等歌を謡ひ神樂を奏し給ひける
 あり岩戸も聞け世も明らり成しり神を知りけ
 世を治る事此の過たる事非し然れば今に至るまで
 神社の前人の前人の家にて祝言の始り執行ふ
 事あり侍る有る幹林葫蘆集りも所見たる村^上天皇
 の大御言ひ諸神を敬ふひ万民を安する事申樂し過
 たる無しと宣給へるか如く然る戲りたる鳴呼
 の手振りの中ニ神も愛給ひ怒れる心も和む者あ
 りければ天鈿女命の俳優して天照太神の御怒を解

見え松葉命も
 入道殿の佐流賀
 宇小云々あり

奉りせ給へる歌舞あり世の聲しへ無き吉例のあ
 る有ければ言痛き漢風の理屈を離れて直く正しき
 古昔の様を思ふ可き者あり^{此はしり日神の御}
 るが故に尋常の理屈を以て解^{怒斜ありさる事ある}
 るを以て然る鳴呼あり俳優をして^{八百神を大々笑}
 かせて日神の奇りこそ思ふ可く謀り^{出奉り}
 玉と為りたる者あり思兼神の深謀遠慮ハ此の在
 る事か儲猿樂ハ上り引る本朝事始の趣に依る時ハ
 正しく猿樂と書て猿舞と訓つ可き事あり然るを源
 氏少女卷ハ流賀字のあり^佐宛しげハ云こと有れば
 又猿賀字も其項云^{を後猿賀と云ハ三君ハ一者}ありけり内侍所御神樂次第
 中或又有奉^下仁散樂之者訖佐井波利次星次朝倉^{倍從}歌^之

云々有を神樂譜の取物了藏司勸益酌然後人長立
座天庭火之前出来云可仕才之男石須云二或下臈之
中於散樂堪能之者人長不著座天志頻召返天志令盡其才
事畢人長更向御前天申云男共令立天各才試了今改
前張可仕之狀申利多則自唯称天志歸本座了と有り斯れ
ハ神樂の次催馬樂の先ハ在る事能の間ハ狂言と云
者有が如くある可一江次第標注ハ散樂猿樂也と云
ぬハ西戎の散樂の字を取用ひてこり有けれ意
ハ全く猿樂ハあむ有ける彼此相混ふ可うとす右の
萌盧集ハ村上天皇辨散樂御製詩ハ且學岷猿之奇態

莫泥水鳥之陸歩又宣ハせたるが如く惣く甚く嗚呼
ある態を為て可笑一げあるが猿樂の本意ハ有け
る源平盛衰記ハ猿樂と申すハ可笑一き事を云續け
て人をハ笑ハ一侍るがう一見え猿樂記ハ種二の
可笑一けある戯れたる舞の名共を擧て都猿樂之態
嗚呼之詞と云ねハ人を左右無く咲動ま一むる為の
所業ハあむ有ける但散樂と作了をと散を佐流と訓
此ハ漢籍文獻通考云ハ散樂野人為樂之善者非都
伍之正色也云有を取ハ散樂野人為樂之善者非都
ハ右ハ云三が如く神を感け者ハ奉ハ人ハ知ハ野人
の樂ハハ月を回ト有ハ歌舞ハ有ハれハ然ル野人
て云へうとざる者あり○神樂ハ此ハ天鈿女命の能

優の起りけり事ハ上代本記ハ神樂起 在昔素戔
 鳴神奉為日神行甚無狀中略即猿女神伸手抗色或歌或
 舞踊清淨之妙音供神樂曲調當此時歎解神怒略故依
 旧氏之權猿女氏率末目命孫化倉男女轉神代之遺迹
 而今供三節祭永為後例也有此事本縁ハも出た
 り公事根源内侍所御神樂條ハも大凡神樂の起ハ天
 照太神の天岩戸を閉て籠り給ひし時諸神の祈申さ
 れけりハ天鈿女命眞折葛を鬘マしてハ蘿を予纏ハし
 て歌舞ハ庭火を燎ハ古より始ハる事ハ以ハ吾朝の
 風俗神代の縁起ハ別ある可キ也ハも有カ如く

鎮魂の式ハ更あり惣マ世ハ行ハるハ神樂の所作ハ
 本ハあり此時の義を移ハりたる者あるハ上ハ謂ハゆる
 態招ハ俳優の字を書ハりたるハ人皆神樂ハ猿樂ハ
 を一ハして共ハ戯ハたるハ歌舞ハありハ思ハふハ委ハしハ
 りハさハ可キ神樂ハ雅正ニあるハをハ云ハひハ猿樂ハ割戲ハたる
 をハ云ハふハ有ハけるハ其ハ本朝事始ハ舞樂ハ青海波ハ皇ハ明ハ天
始之ハ豊田ハ星鏡里ニ伊勢乃宇美等之神樂駿賀舞ハ明
直始ハ舞ハ之ハ天皇二年始ハ之ハ駿賀連製ハ之ハ有ハ其青海波ハ唐の世ハ青海舞ハ
 云有ハ其ハ何ハも有ハ以ハ世ハ云ハふハ舞樂ハて我ハ古の
 物ハハ非ハるハ星ハハ催馬樂ハ謂ハゆる明星をハ梁ハ莖ハ思

引引千者也布留賀茂能也之呂 於乃於此女古於末川引
安者礼引衣引比女古於末安川引與呂川世於不止於毛
於以呂於者安可者引安良之安波礼引衣引以呂者安可者
引安良之有ハ恰引も西戎の樂譜引似たれ之雖も古
事記白檮原段大御歌の疊引音志夜胡志夜此者伊基
能布曾阿引音志夜胡志夜此者嘲笑者也と有て疊ニ
阿ニハ音の引く標を付たるハ御紀ハ此歌を記され
たるハハ右の句共を漏さるけりけりとも是謂来目
歌今樂府奏此歌者猶有手字量大小及音色巨細此古之
遺式也之見えたるハ其曲節の定格有て古より正し

く傳ハり来つる者あり然れハ八洲起元章ハ所見た
る唱和の御詞をも古今集序ハ此歌天地開け始りけ
る時ハ出来りけり」と有て其本註ハ天浮橋の許ありて
素神夫神と成給へる時ハ歌あり」と註されたるハ實
ハ歌の始あり彼天柱を往巡坐るハ婚姻の太礼あり
て歌儂の事ハ非ずと垂も其第十書ハ陰神畔便
握陽神之乎遂為夫婦と有を以思ハハ唯ハ唱和ハ御
詞有ハハ之も見えす必御所作も御在ハ坐たりけ
りし備其御詞ハ僅ハ十言あるを物ハ書附たるを
ハ如く有るハハ甚延魚ハ可ハ必其曲節を添て詠ハ

言為させ給へりけむ事此の神樂の例を以ても想ふ
 可き事ありけり又古語拾遺に九鎮魂之儀有天鈿女
 命之遺跡と有る此の故事の依りて天孫本紀に九
 厥鎮祭之日猿女君等主其神樂奉其言大謂一二三四
 五六七八九十而神樂歌儂と有る奉其言大謂と云る
 ハ大の詠言為るを云あり斯れハ唯ハ其翻戲言の
 之を神樂と云ハ非ず其雅正ありて紀律有るを云
 神樂歌と云ありける然れハ今傳はる歌ハ後ハ出
 来りるも少くも其曲節又字量の事ハ於て
 ハ猶神世の遺風ありて更ハ唐高麗等の所作を学べ

るハ非ずありける顯宗天皇御紀室壽御詞の所ハ
 天皇遂作殊儂と有る下ハ殊儂古謂之立出儂立出此
 云多豆ニ儂狀者乍起乍居而舞之と有る此を養老私
 記ハ今東舞是也と有り又其事を古事記ハハ尔遂尼
 儂訖次第將儂時為詠曰云ニとも有る如く言を詠り
 起も居もして儂ハ事古ハ在つるを思ふ可くあり師
 三五本國考ハ謂ハたる如く彼西我を取め給ひし古
 の王者等ハ悉ハ我ハ神眞の彼ハ出興ハ給へる由ハ
 りハ竹書紀年大昊庖義氏立基之樂と有る篋ハ外
 記曰帝作荒作歌扶扶以鎮天下之人命曰立本亦曰立
 基古微書曰按扶采之歌即神農之扶也乘梨音相同
 紘是知神農因大昊之樂マ云ハ又黃帝の樂を咸池と
 云る按采ハ皇國の事あり成池ハ我ハ速吸門あり事
 師説の如し然れハ扶成池ハ彼西我の舞樂の祖也

△神樂譜の所見
 なる阿知女酒の奉方
 阿知女於三三末方
 於か有るふて天
 細女命の立舞い
 を八百万神の取難
 し給へる古言の傳
 りあり傳

るが我皇國の傳たるを以て神樂催馬樂等の譜の
 曲節ありし彼の似たるは彼の似たるは我が似たる
 十卷小節墨譜之事或曰世謂節墨譜者其名別而実一
 也然二名連続之者曲節高下能以合于墨譜故美之
 而重言字凡号節者唱色必有高下準之竹節故記節字
 也号墨譜者以墨圖高下而能計合之故記墨譜也譜即
 信矣世多以色之高下爲節亦其中大振小振等之品
 号之墨譜也是未論乎墨大振小振皆色之高下然則共
 附て曲節を示し神樂催馬樂等の字の左右小墨譜を
 たるを云あり 傳 神樂歌の甚古くして神世の仕
 るハ右の引る一二三四五六七八九十の歌あるが此
 ハ後世鎮魂祭に被用るのこあり其言意ハ下十 百
 の云ハ一又上 百六十 引る神樂採物歌の幣美天久
 良波王加仁波阿良須阿女仁万須止典遠加比女乃宮

乃美天久良美也乃美天久良杖古乃津惠波伊川古乃
 川惠曾安女仁万須止典遠賀比女乃美也乃川惠奈里
 美也乃川惠奈里篠古乃佐ニ波伊津古乃佐ニ曾安母
 仁万須止典遠賀比女乃美也乃美佐ニ曾美也乃美左
 ニ曾梓古乃保古波伊川古乃保古曾安女仁万須止典
 遠可比女乃美也乃美保古曾宮乃美保古曾と見え
 る此幣杖篠梓の歌ハも意も詞も甚古く雅正ありし
 て今現ハ採る物を指て天上ハ坐豊園姫神の御物
 云成す事ハ祝詞ハ故皇吾睦神漏伎命神漏弥命登皇
 御孫命能字豆乃幣帛字称辞竟奉久宣と有ると同ト意

味あり歌ありける、高千穂宮より以降、用ひ行ひ
以來つる古き神樂歌ありけむとある所思えたりけ
る斯る小神樂の取物九種、して神幣杖篠弓劍鉾物葛
ある中、小僅、小上、小拳、三種、右の如く止事無き
故由を傳へたる唱歌の有、小自餘の五種の歌の甚く
後收たる、小就て考有り、神幣、幣帛を取懸る料あり、
古の幣と、別たさし、あり、むら、劔、鉾、後、小加、
水者あり、可し、葛、此、小天、鈿、女、命、の、身、小、裝、給、へ、る
物あり、けれ、古、小、椽、物、と、為、り、れ、ざ、り、け、る、ゆ、て
右の五種の歌、古、小、非、り、け、む、う、後、世、其、式、の

甚、大、成、り、る、小、就て、次、小、其、唱、歌、ハ、出、来、成、り、る
あり、有、む、す、く、む、其、ハ、或、樂、人、家、記、小、神、樂、催、馬、樂、曲、之
事、家、傳、云、淡、海、三、船、撰、之、多、氏、ハ、相、傳、ふ、右、近、將、監、多、自
然、麻、呂、神、樂、催、馬、樂、之、祖、也、故、小、神、樂、の、時、今、小、神、を、取
て、人、長、を、勤、む、云、こ、見、え、たる、淡、海、三、船、主、ハ、養、老、小
り、延、曆、の、初、小、亘、る、人、あり、又、体、源、抄、小、舊、神、樂、譜、昔、見
觀、御、時、被、撰、定、る、有、を、催、馬、樂、磯、等、前、の、下、小、此、時、貞、觀
神、寧、之、時、撰、定、歌、見、え、又、東、遊、譜、奥、書、小、延、喜、二、十、年
十、一、月、十、日、勅、定、之、有、り、又、催、馬、樂、朝、倉、の、下、小、延、喜、二
十、一、年、勅、定、也、神、樂、遊、仕、時、ハ、神、音、振、あり、有、り、此、事、悅

たりし者故神樂採物歌を次ニ小琴へ
 ありけり賢木葉佐加幾波乃加字加久者之美止永久礼波也八十代曾宇知
 比止曾万止為世利計留万止為世利計留と有る此歌
 拾遺集神祇部二百六十九出たり佐加幾波ハ上十九丁出づ
 也曾宇知比止ハ八十氏人小て其御神樂の場侍
 小入ニを云ひ万止為ハ圓居あり末加美加幾乃美
 牟呂乃也未乃左加幾波ニ加美乃美末戸仁之介利阿
 比仁介利之介利阿比仁介利と有る此歌古今六帖ハ
 貫之神樂と有て初句神垣也と見えたり神垣ハ神籬
 ありて此ハ神の宮所ト結ふ限を云て御諸と云む

發語あり御諸山の事ハ宝劔出現章第六一書の傳ハ
 云へし又裏書云或本神木歌とて本左加支波仁由不
 止利志天ニ多加與ニ加ニ美能美牟呂字伊波比所女
 介牟と有る此歌拾遺集ハ神葉ハ木綿無懸て誰世
 あり神の御前ハ齋ハ初けむ六帖ハ三句誰々如此
 と有り末志毛也多比於介止加礼世奴左可支波乃多
 知左可由へ幾可美能支祿加毛一本ハ二句於介止
 毛加礼奴と見え六帖ハ結句加毛を加奈と有り又
 六帖ハ神樂を貫之歌ハ足曳の山の神の常葉あり
 陰の采ゆ神の木根も又柳葉の常葉あり有るハ

下四百五十五言
拾遺の歌想本葉
を考す所考合す
可

長けく小命保て神の本根の道と有る依りか全く
貫之まの歌めて有けり然れ此神歌ハ上ノ謂ゆる
延喜の勅定あら依て定ぬるよて古事傳ハる歌ハ
無りけるみろ有けり賀茂翁説ハ可美能支祢ハ
ハる事ノ聞ゆ神葉の栄ゆ事ハ寄て祢豆女を納め
りて有り年中行事抄ハ載り鎮魂歌ハ伎祢古
字云一句有る伎祢ハ右ノ同ト云可ハ右の本歌
ハ神葉ハ本綿取金こ有ハ此ハ見えたる太玉串
遺制あり又幣ハ本方美天久良波王加仁波阿良須阿
女仁万須止典遠加比女乃宮乃美天久良宮乃美天久
良マ有る一本ハハ宮を神ハ作り河海枚少女卷ハ
引ねたるハ三句天ハ左須マ有ハ誤寫あるハ也末

四十八丁中吉野川
奥名豆規

美天久良仁奈良万志毛乃遠須ハ加美乃美天仁止
良禮天奈津佐波万之遠奈津佐波万之遠マ有ハ上ハ
記せる本歌有ハ詠添たる者あり一本ハハ終の二句
奈津佐波苗戸久マ有リ楮此歌も拾遺集の神樂歌ハ
也戴ナリ幣帛ハ神ハ捧る物あり奈津佐波万之遠ハ
葉三卷五十一丁ハ茵花香君之牛苗鳥名津西末興ハ
卷十六丁ハ鳥自物魚津左比去者九卷二十一丁ハ
有者無津柴比渡十五卷十一丁ハ安氣久礼導於伎ハ
奈都佐布十三丁ハ柔保等能奈豆左比由氣婆廿四
丁ハ奈美能字倍由奈豆佐比伎尔氏十七卷四十五
ハ可賀里左之奈豆左比能保流あるハ那豆佐布ハ
物ハ親ハ訓睦ハ杖ハ本古乃津惠波伊川古乃川惠
添ハ云言あり豊國ハ本古乃津惠波伊川古乃川惠
曾安女仁万須止典遠賀比女乃美也乃川惠奈里美也

乃川惠奈里秋有る美也を一本ハ神ハ作り来安不
佐加遠今朝計佐古衣久礼波山人乃王礼仁久礼多留也万
川惠曾古礼山杖曾古礼是有る此歌拾遺集梁莊鳥案
抄体源抄等ハ出たるハ下旬午止世川計止天幾連留
川惠奈里幾連留川惠奈里有る山人ハ賀茂翁説の
如く万葉九丁詠仙人形有て常之陪尔夏冬往哉衰
扇不放山住人又二十丁先太上天皇云ニ即御口号曰
安之比奇能山行之可婆山人乃和礼尔依志米之夜末
都乃曾許礼舍人親王應詔奉和歌一首安之比奇能山
尔由伎家年夜麻妣等能情母之良受山人夜多礼見

王佐日記ハ撰取
鯛持て来たり酒
あり久道見え
たり

元葛歌ハ安奈志乃世万乃山人止あど有る山人ハて
謂ゆハ仙人の事ハあり王礼仁久礼多留ハ哉尔授
有あり傳十七五丁ハ云るが如く上章第二一書ハ可
以授予集ハ有を旧訓ハ以授を久礼ハ訓ハ同トハ又
或説杖本安志比支乃也万字左可志美由不川久留左
可支可江太字川惠仁幾利津留の結句一本ハ幾利を
川支有る方宜ハ由不川久留左可支ハ上ある或本
神木歌ハ左可支波仁由不止利志天ニ同トハ太幣
帛の事あり榊を杖ハ撞く事ハ神功皇御紀ハ御名衆
坐る天照太神の荒御魂の犬御名を撞賢木嚴之御魂

今可く又此杖の神て
説有り下四百九
まふ

天疎向津媛命と申奉る是あり傳十三百二見三可一
末皇女加美乃美也乃川惠止也乃比止乃予止世字
以乃利支連苗美川惠所と有る此ハ右の安不佐加遠
云ニの歌と本ハ異ありさり一あり可一皇神の御山
住世御在し坐す山を云るみて右の神歌の未ある御
諸山此ハ同ト皇神の御諸ハ奉るとして仙人の予年を
祈り祝て作ゆめとあり大凡仙家の事を能云ふハ
西蕃の常ハて其ハ種ハの怪談奇説も多く交りて
信難きを此ハ唯ハ大ハ種ハの怪談奇説も多く交りて
乃佐二曾安母仁乃須止典遠賀比女乃美也乃美佐二
曾美也乃美左二曾と有る安母ハ天の轉あり美也を
一本ハ神と有る事上の例の如し一本又梁藝愚筆抄

今万葉十六行出懸
有及云他家礼流
と見え又
ワ下下五百七
折の竹の事ハ勅と引
清女納言栲華命
ハも固ハ栲固儀の
生たるハ可也と有て
皆より篠ハ名有る
地あり

体源抄共ハ三句以下を止言人書祢利良加古之仁左加礼留
止毛字加乃佐二止毛字加乃左二と有る止利ハ職員
令内舍人の下ハ掌帯カ宿衛供奉雜役若駕行分衛前
後大舍人察義解ハ謂大舍人は供奉之人と見えられ
ハ供奉あどの時ハ鞆を腰ハ懸る者あるガ故ハ序と
爲るハてハ和名抄御名ハ山城国乙訓郡鞆岡度毛と有
る是あり此ハ右ハの歌の有を取換て被用たれ此を
以て其歌の甚古うりけむ事を知べし末佐二知分波
曾天古曾也礼女止祢加波乃伊志波布無止毛伊佐賀
波良共里伊佐加波良共里と有る止祢ハ和名抄郡名

上野国利根^止と見え万葉十四^{十三} 上野国歌^{小刀}
 祢河泊乃可波世毛思良受云二と有^三是あり然^ハ
 此ハ凡俗歌ありけむを^{取用}ひ^したりけ^り
 う又或説^{篠本}佐^三乃^波仁^由支^布利^川毛^留布^由乃^興
 仁^止典^乃安^所比^遠須^留可^太乃^志佐^と有^る結^句の^佐
 字^梁塵^惠案^抄小^ハ伎^作止^典乃^安所^比ハ^豊明^の
 の事^{あり}可^し万^葉十^九二^十乃^安美^知之^吾大^皇乃^神
 奈我良於母保之賣志氏豊宴見為今日者毛能乃布能
 八十伴雄能島山尔安可流橘宇受尔指紐解放而十年
 保伎保伎吉等 餘毛之惠良二二尔仕奉字見之貴左

又有^るを^合せて^豊遊^の義^を思^ふ可^く有^る末^美
 川^加支^乃加^美乃^美典^二里^佐乃^彼字^太布^佐止^二利^取
 天安所^比乃^良志^毛乃^美川^加支^乃ハ^契冲^説乃^万葉^四
 下^十四^ハ水^垣之^久時^從憶^寸吾^者十^三二^ハ柁^垣久^時
 從^意為^者あり久^しき^意ハ^続け^{たる}如^く此^も其^意
 あり^云云^か如^し多^布佐^ハ多^久佐^を誤^りる^{あり}古
 事記^ハ手^草結^天香^山之^小竹^葉而^云云^証有^り上^三
 六^十ハ^云云^を考^合す^可し^此を^本の^任乃^多布^佐と^為
 下^ハ云^る如^く瑞^珠盟^約章^ハ腕^字を^多夫^佐と^訓り^後撰
 集^ハ通^照カ^折フ^ハ多^夫佐^ハ腕^字を^多夫^佐と^訓り^後撰
 佛^ハ花^奉と^有る^ハ折^る時^ハ腕^字を^多夫^佐と^訓り^後撰
 事^ハゆ^て手^端を^云云^非ハ^折る^時ハ^腕字^を多^夫佐^と訓^り後^撰
 猶^能考^ふ可^し儲^又此

○日本書紀傳十九

○三百七十七

小美川加支乃云て久しき古の事と為るハ奈語の
 足日本能青丹吉あとい必山と受け奈良と続く定格
 ありハ万葉三卷四十四下ハ足引乃許乃問立八十一十一卷三十
 八卷二十八下ハ足引乃許乃問立八十一十一卷三十
 下ハ足引乃許乃問立八十一十一卷三十
 能半底母許乃毛吹夜者十七卷四十六下ハ安之比奇
 一又五卷六下ハ阿字尔共斯久奴知許等其等と有て
 此ハ奈良の事ハ係て中洲久奴知許等其等と有て
 類ハ奈良の事ハ係て中洲久奴知許等其等と有て
 始ハ奈良の事ハ係て中洲久奴知許等其等と有て
 志奈古ニ支毛乃遠安川佐由美万由美川支由美志奈毛
 二止女復志那毛ニ止女須と有を一本ハ末句志奈古
 所安留良之と見え又一本及梁莖愚梅柳体源柳等ハ
 ハ志奈古所安里計礼と有り此歌新勅撰集ハ載りれ
 たりハハ結句一品も無しと有ハ聞元難し賀茂翁説

小梓弓檀弓攪弓と其本ハ依て種類ハ差別ハ有れど
 唯ハ弓と云時ハ何の事ハ別ず聞ゆと云事ハ志
 奈とハ種類を云ありと有ハ如し末美地乃久乃安津
 佐乃万由美王駕比可波也字也字典里古志乃比志乃
 比仁志乃比志乃比仁此歌梁莖愚梅柳体源柳共ハ陸
 奥の安達の檀弓攪引ハ末さハ寄来忍ニハと有り
 万葉七三十三寄弓陸奥之吾田多良真弓著懸而引者香
 人之吾字事將成十四十六ハ美知乃久能安太多良末
 由美云ニハと有を和名抄郡名ハ陸奥国安達
 改り其ハ因て詠るあり又裏書ハ或弓末佐川字良

加宅多世乃末由美於久也末耳美加利須良志宅由美
 乃破須美由有佐川守良海宮遊行章の海幸彦
 山幸彦の頼めて狩獵の人を云り万葉十五佐豆人
 乃弓月我高尔又九丁山邊尔射去薩雄者又四十山邊
 庭薩雄乃祢良比あ有是あり又一六丁の大夫之
 得物矢手柳六丁御獵人得物矢手挾あとも見ゆ
 又本典宅也万乃万宅利仁多乃年安川左田美加身乃
 多加良仁伊万之川苗加奈或本二三句比止乃万宅
 利二須苗由美遠有拾遺集神樂歌ハ四方山の
 人の宝ハ為弓を神の御前今日歌三見えたり

弓を宝々云事ハ春日祭詞ハ貢流神宝者御鏡御櫛刀
 御弓云ニ平野祭詞ハ進流神財破御弓御太刀云々
 見えたり此ハ武用ハ供あ弓を今神財として奉
 由の歌あり末安川左由美没留久留古止仁須女加美
 乃止典乃安所比仁安八武止所於母不有豊遊ハ
 上ある篠歌ハも有の神事ハ就て豊宴為事あり
 の典宅也万乃を賀茂翁説ハ或人の四方ハ方々云
 説を載り出たり栄花物語花山巻ハ今年ハ世中ハ痘
 瘡云物出来て典宅也万の人上下病ハ罵ハる云
 有を古本ハ典宅也万有又俗ハ四方ハ山の物語
 するマ云山ハ典宅也万非又四方ハ面の事共を
 語ハるあれハ此ハ典宅也万有也其義ハ見ヤ勝
 可ハハ本志呂賀祢乃女奴支乃多千遠佐波支

山下の篠歌ハ同
 有り考合す可

傳三十二百九十一
 注さぐ如く香記長
 曆三年小室劍
 柄方乃加不止同
 乃釘乃片方板
 落了と有て具
 釘の事を凡銀
 新加入を有憚
 歟と云り
 △然も時ハ此二の
 一を以て片方と
 石ヲ云ふる可し

天^{平城}祭良乃美也古^都遠祢^遠苗波多^誰賀古曾祢^遠苗波太^誰加古曾
 一本^遠の末句祢^遠利和^遠多^遠苗加奈^遠に見内此歌又拾遺集小
 出たり祢^遠苗波の波を也と有り^{志呂賀祢乃}女奴支ハ自釘^目穴を契
 く釘を銀以て物為たるを云云中右記寛治八年の下
 小^遠劍の事を云る小目貫之穴二と有り祢^遠苗ハ万葉九
 三下^遠小焼太刀乃予預^神祢^遠利と有ハ劍柄を押^遠て遠^遠
 五下^遠小焼太刀乃予預^神祢^遠利と有ハ劍柄を押^遠て遠^遠
 之行く事あるが其と同トさか文^遠遠^遠小遠^遠遠^遠字をも祢
 留と訓たるを註^遠の徐行也と有り是^遠あり末以曾乃加
 美^遠不留也遠^遠止古乃多^遠知毛可奈久美乃遠^遠志天^遠二美
 也知^遠加典波年美也知^遠可典波年^遠と有り初句ハ石上小
布苗 男 太刀 宮地 通 此心拾遺集載りし情

△此組緒と云ハ知
 名抄服玩具小紋
 札記注云云綾
 和名所以質^遠玉
 相受承地又用組字
 禮と有る此を此
 を大りの飾^遠を
 云云云可し
 播磨風土記ハ皇
 行天皇の御佩^遠
 の装を云ハ御佩
 刀之ハ忍紐之上
 結ルハ忍紐下結
 糸麻布都鏡繫
 と有る句の字の
 下ハ決く玉字を
 脱せらる玉を

小地名の布苗^遠係れ^遠祭語あり不苗也ハ振也ハて
 古事記明宮段吉野之國主等^遠膽大雀命之所佩御刀歌
 小波加勢流 多知母登都流藝須惠布由と有り布由
 ハ振^遠あり^遠同ト^遠此ハ懸佩^遠なる太刀の末方の振搖
 くハ勇あ^遠しきを賞たるあり組緒垂てと云るも大刀
 を懸佩^遠く帶取^遠の組緒を云て其末の振を希へる由ナ
 り又或本歌ハ本伊波比古之加美波末川利川安須^遠典
 利ハ久美乃遠^遠志天^遠二安所^遠心^遠太知波^遠幾^遠と有ハ祝来^遠
 神ハ祭り畢^遠少明日^遠乃^遠ハ太刀取佩^遠て神樂せむと物
 部の互^遠ニハ誘^遠合^遠る義あり可し末於支川^遠支仁須免加
装束ハ為むと 神 祭 明 日 自 皇

又三行奥津城坐
之野勢流

神等美多知遠伊波比古之古^心二呂八伊^今万曾^多乃之加里^今分
留^有于於支川支八万葉^{三四}十^八十^十奥^柳宇此間登
波間持又間^二能于兒名之奥津城處又^七十^十吾妹子之
奥柳常念者波之吉佐宝山九^三十^十處女等賀奥城所
又毒^同之菟會處女乃奥城叙此^文又^六十^十奥柳宇往^來末跡
見者哭耳之所泣^有有^て右等ハ何れも人の墳墓を
云^は言ハ奥津城^ハて墳墓の名ハ非^ず神の御靈
を奥^更りたる御室内^ハ令坐奉^れる其言を借用^ひた
り^し者あり此^本末を誤^る事無^れ賀茂翁^説ハ於^支川
葬^むるを^も云^はれ^ば此^を思^ふハ奥^深く祝^ひ奉^る御^室
を^も云^はれ^ば奥^柳の宇^ハ當^れる言

と思誤^るハありけり葬地ハ墓^と書^て波加^と云^て
事^足ぬ^るを殊^ハ然^しも云^はれ^ば其^靈を祭^る如^きハ云^は
と聞^ゆる^ハあ^ら思^ふ合^す可^し借^る右^の不^苗也^を同^説ハ云^は
葉^十六^卷十^八下^ハ虎^ノ乘^古屋^宇越^而香^洲爾^殿龍^取
將^来ハ^六卷^十八^下ハ^虎ノ^乘古^屋宇^越而^香洲^爾殿^龍取^ハ
乃^ハも^必然^{あり}も^云難^し猶^能考^ふ可^き事^{あり}
ハ^梓ハ^本古^乃保^古波^伊川^乃保^古曾^安女^仁万^須
止^典遠^可比^女乃^美也^乃美^保古^曾宮^乃美^保古^曾一^本
又梁^莖愚^察枚^体源^枚共^ハ末^句美^也乃^保古^奈利^と有^り
り^未典^毛也^乃比^止乃^万保^里仁^須留^保古^遠加^美乃^神
美^万敵^尔伊^波比^多天^多苗^伊波^比太^天太^苗ハ^此も^一
本^及右^の二^枚ハ^末句^伊波^比川^留加^奈と^有り^借此
初^の典^毛也^乃ハ^上あり^或本^万歌^ハも^有り^て四^方

八方の義ありあり儲此小天鈿女命則手持茅纏之箱
云ニ有る如く甚々止事無き物あり有を鎮魂祭小
此の儀を傳へて御巫履字氣槽立其上以栴檀糟と
云事儀式中所見たり然る小神樂の其作法ハ無
て栴も採物の一種あるか故に上古小己右見元
たす 歌ハ成て傳はりて後世中詠添て本末の合
せたりし者を見内 右の万保里ハ石歌の共也万乃
有か如く万毛刺を然唱説れり一者あり若て其意ハ
引のち有れ栴あり有れ武士の不慮ハ備ふる器ある
故の然守り栴ハ本於保波良也世加為乃志美川比佐
ハ云るあり 嗚 古毛天止里波奈久止毛安曾不世遠久女安曾不世遠

久女一本又二枚共小志美川を美津字と作き末句安
曾比天由可武と有り六帖のハ大原也堰之井の氷を
手ハ汲て鳥ハ啼とも遊びて行むと有を取直して杓
歌ハ為つるあり世加為ハ愛宕郡小野郷の大原の
事と為めぬとも夫木集小匡房夜を寒と世加為の水
ハ木とも庭火ハ春の心ちこゝろ為れと有る庭火ハ
神樂の庭燎を云るハ大原の然る神社無して訓郡
大原野ハ春日社御在り坐て古ハ止事無く采え
させ給ひ春冬の御祭も大和の春日御社ハ後代させ
御在り坐ざりてを思ふハ其頃藤氏ハ世ハ勢盛あり

○日本書紀傳十九
○三百八十二

一程ありけりば貞觀の神樂の御撰有し時其社の
 寄せ有をよさせ給へる可きや或説の瀬和井
 在春日社地今亡在勝持内境内之云水とも共の思来
 無き事あり賀茂翁説の世加為の堰之井あり古本伊
 勢物語の大原や堰の清水を云に有る是あり云
 水たきか如く次の板井の堰井あり對へて流水の
 堰井を詠るあり千五百番歌合の園居して如何遊ハ
 玉五月雨の世加為の水も岩越のけりとも有る堰井と
 ハ更の聞えざりける者をや四五の句ハ鳥ハ水を汲
 の驚き啼とも其遊居る瀬を汲ハ興有むとあり次

中末和可止乃伊多為乃志美川佐止保美此止之
 久万祢波美津佐比耳介里美川佐比耳計利一本
 末句美久佐於比仁介利望塵愚案抄体源抄等ハ右
 の於比を為マ作り古今集採物歌ハ吾宿の板井の
 清水里遠ミ人し汲ぬハ水草生ハけりとも有り今井似
 削説ハ板井ハ板を並べて井を為さあり云ハ美津
 佐比ハ水淡の浮く事ありマ云れたるめて聞えた
 り此の採物ハ杓の有る事の見えたるハ神ハ水を奉
 百四十回下中云るガ如く日神の磐戸隠り御在し坐
 る為ハ火神の御光さへ隠るハ給へりけり其御怒
 を鎮め知むる意を以て被用たり可き者あり云ハ葛
 五下天吉葛の事を云るハ思合す可き者あり云ハ葛

此歌年中行事
 秘抄の鎮魂歌
 も出たり末句美
 也万加川良世共
 有り
 今奥儀抄山鬘史と
 八神樂すつふと具
 辟葛少て頭を結
 あり具を山鬘史と
 ハ云ふと注りれなり
 袖中枚九つ石の哥
 を引て教長紳云成
 師の山の木を伐て御
 神樂の庭大かち焚
 き諸社の祭ふも奉
 る主殿寮の沙汰
 あり此木匠も人ハ
 鬘史本編と云物と
 物の時ハ皆此本編
 を引て冠の額を
 額より後へ引回し
 て結へる事ハ是ハ
 神事を教長史に
 る事ハ大方諸社奉
 上納解ると供神
 物の時ハ皆此本編
 を引て冠の額を

ハ本和幾毛古加安奈志乃也万乃山人止比止毛志苗
 可^山久世万加川良世共山加川良世共古今集採物歌
 引^山卷向の穴師の山の山人も見るも山鬘為
 正と見え六帖ハ初句吾妹子と有り見るかハを
 見るかハぬと言換たり和幾毛古加安奈志と続けたる
 ハ夫婦して物を相成す義の発語あるか故ハ吾妹子
 加を吾妹子加めても禰を事あり宇奈志乃也万ハ
 万葉十二^三下^十ハ纏向之痛足乃山尔と有り是ハて常
 ハ云ハ卷向山の事あり山人の事ハ上あり杖歌の下
 ハ云ハ末^但庭^火美也万耳波安良礼不留良之止也^外

余久人長庭火乃前
 に出末云こ仰御
 火白短歌礼次云
 御笛可任及男古石
 須則笛吹矢多藤
 突庭庭火乃笛遠
 吹り云て

万奈留万佐支乃可川良色川支耳計利色川支耳計利
 此歌古今集ハ出たり儲右ハ葛字の下ハ但今世不用
 註ハ御前作法次第ハ取物九種を奉たる葛の下ハ
 但不用之ハ有中項採物の員ハ被加たれども元
 眞坂樹ハ鬘史と為る者あり故ハ省りねたるハて有
 けり又末字下ハ但庭火唱之と有ハ神樂歌次第
 ハ合兩字天為拍子之出音類其詞云美山仁波安良連
 布留良志止也末奈苗^庭大音苗之間仁人長仰云本乃
 方仁候ハ立膝突天著座了^双次末乃歌遠召須同前也
 仰云末乃方仁候ハ次人長申云男共令立^天各乃才試

△下四百七十大處候
の所々を見合す
可し

了奴今ハ御神態可仕之狀申利多則自良唯祿ヲ天 歸座
 天著了次始御神態有れば全ク庭火歌之成て神樂
 の試樂ハ此歌を本末分て試調ふ右
 美山仁波云この歌ハ仕奉ゆる人を本方侍ハしめ
 次ハ末乃歌遠召須同前也有ハ止也万奈留云二の
 歌を右の如く仕奉る事ハて此事訖て未方侍ハし
 むるあり次ハ男共令立女天各乃才試了奴ハ侍ハし
 火歌を以て調ハ試る事を云あり故譜ハ採物ハ此庭
 序ハ依て此歌ハ出たる事ハ有れば始て庭燈
 を焚初る時ハ在る事ハ此ハ次ハ韓神 本見志
 右ハ不綿招 加仁止利加介和氣可良加見波加良
 万由加仁止利加介和氣可良加見波加良
 支世武也加良字支世牟也自第二度加太仁有了此
 ハ採物ハ萩をも為つる事の有ける十一月ハ

園韓神祭の有ける其事ハ寄せて一の歌曲ハ出
 来りたる者あり四時祭式ハ園并韓神三座祭園一
 神ニ 五色帛各八尺云以上神祭料 五色帛各三尺朝神云
 云右春二月冬十一月五日祭之春用春日祭後 云ニ
 有て神祭料々神樂料々を別ハ載りたるを以て
 知べし借見志万由不ハ梁塵秘抄ハ伊豆国三島々云
 所より出る木綿あり有を式ハ安藝木綿一介冬
 木綿八竹々有れば其ハ木綿云々有む三島木綿を
 用了れたる有可き韓神ハ大己貴少彦名二神を申
 して加良字支ハ韓招りて右の二神の木綿襪を取懸

させ御在り坐て頻々韓國を招て皇御孫尊の御奴国
 又仕奉るの御在り坐す義めて崇神天皇七年御紀
 あり大物主神の御託言の海表之國自當歸伏と有
 り類是あり但其甚く後の事にて天磐戸の昔の事
 のハ非れども其時にも天鈿女命の手草を採りて如
 何れも為て祈奉るむ空招ハ為さしと深く思入給へ
 る御心の寄せて韓神の御事をも混み為りたりけ
 るゆころ有けめ未也八葉盤比良天字天耳止利毛知天和礼
 加良韓神加見乃加良字支世武哉加良字支世牟也自第二
 止利毛知天典利唱と有る也比良天ハ和名枚神祭具ハ葉手漢

語云比良天と有る是なり備葉字ハ神の供る物を
 盛て備ふる器めて内侍所御神樂次第ハ大膳職以打
 敷神膳等并傳女官中略典侍供神御前高坏物六本一本
 飯一本四種小器一本汁器一本主物一本干物一本菓
 種四有る然る供物の事ハ依て云ふれども此を韓
 神の事ハ係たるを就て考有り其ハ古事記詞志比韓
 征の幸行の時住吉大神の御託の箸及比羅傳多作皆
 二散浮大海可以度と有る頭ハ宣給ハばれども若
 くハ韓神をも祭給ふ可き事を告給へる有るものや
 此事畢て前張ハ移る間ハ人長申云酒司度坏給へ次

殿上乃頭以下可然人取坏_子各座_子給不_云事見元
た_らも必_し韓神_の由縁有_る事あ_らて、此_の叶_はさ
る者あり又此歌の加良字支も右_と同_し事を重複_て
云_るあり上_二百五十_一引_る体源_の加良字支_ハ枯_た
_る萩を云_わや清署堂の御神樂の試樂執柄家_のて被_る
行_る、時人長枯_たる萩を持事有_り是秘事あり_之見
元源氏若菜下巻_の若やうある上達部_ハ肩脱_て略_見
_る詮_カ多_るる姿共_ハ甚_ハ白_く枯_たる萩を高_やう_ハ刺頭
挿_て唯一返舞_て入_ぬる_ハ甚_ハ面白_く飽_する有_ける_云
も見えたり_ハ諸園韓神_の御事_ハ傳_二卷_六十六_一下_ハ
註_{せる}か_ハ如_く大倭神社_注進_状の傳_聞園

神者大己貴_命之和魂_大物主_神也_韓神_大己貴_神少彦
強_命或_云云_二紫野_一今_宮三_社二_家者_流如_右之_見元_其
訖_云往_東海_今為_瀛民_更亦_乘歸_因以_古史_神造_葦原_中國
古_語外_國云_二韓_也云_二有_りて_聞ゆ_古史_神造_葦原_中國
所_御神_樂式_ハ韓_神之_事素_受雄_尊子_也有_ハ右_の侍
神_者伊_孫命_号韓_神曾_保利_神有_ハ此_の寶_府略_記曰_韓
事_の御_紀中_葉盤_此云_二羅_耐見_元若_て葉_手ハ_神武
天皇_御紀_中葉_盤此_云二_羅耐_見元_若て_葉手_ハ神_武
て_玉を_己中_葉盤_此云_二羅_耐見_元若_て葉_手ハ_神武
事_の此_ハ一_如此_有司_官人_參集_宮内_省云_二右_中事_日
捕_時此_ハ一_如此_有司_官人_參集_宮内_省云_二右_中事_日
く_其者_ハ被_行る_事有_ハ故_ハ省_内の_祭云_二右_中事_日
を_以て_共の_被行_る事_有ハ_故ハ_省内_の祭_云二_右中_事日_如
ある_可し_古事_談茅_五の_就て_右の_歌曲_ハ自_坐大_内而_る
遷_都之_時造_宮之_使等_可移_他所_云二_有ハ_如く_止事_無き
此_處奉_護帝_室仍_坐宮_内省_云二_有ハ_如く_止事_無き

○日本書紀傳十九

○三百八十七

神の御在り坐せし神樂の更由無き神の坐
を其の中列せ給へしを考ふ可き事あり体源枚五
巻の載り異本古語拾遺の此天磐戸開の事を記せ
中御歌本方天児屋根命末方太玉命と有然も有
る玉を次御笛大已貴命大三輪明神大和国座云也
の有ハ笑山可事共みて園韓神歌有依て家
の杜撰出たり事共みて園韓神歌有依て家
坐す御事より延て出来ぬ安説の聞ゆれば此も其
神実を徴し申す傍證あり以上採物歌にて神樂歌
も云い云へくわむ以上採物歌にて神樂歌
次第の取物了藏司勸盃酌然後人長立座天座火之前
出来云可仕才之男召須云二或下蔭之中於散樂堪能
之者人長不著座天頻石返天志令盡其才事畢人長更向
御前天申云男共令立天各才試了今波前張可仕之狀
申多則自唯称天志歸本座了所見乃此ハ猿樂ハ神樂

前張との間在り事めて今俗の能舞云物の間
ハ狂言云事の有と同ト状あるを思ふ可き者あり
ハ右の次第を其裏書御前作法次第ハ一取物九
種神幣杖篠弓劔鉾拍葛但不用葛各雄拍子九雌拍子十次
韓神拍子廿次御遊了天酒司二度略中次前張宮
人末綿志天前張辭歌仕了云首分本末各三首拍子本末各尻
上三度次階香取六首本三首末三首鳥毛不被取止云
拍子用次薦枕靜歌拍子十本尻上拍子十四次志都也ハ
三拍次薦枕靜歌拍子十本尻上拍子十四次志都也ハ
菅磯等前二首籠出子如韓神振拍子不用次篠波殖春上
卷大宮湊田荳尔近至仁拍子遠拍出拍子不同以下雜

歌拍子共 仁出次吉ニ利ニ得錢子由不作等拍子打出
拍子不用次朝聞畫目取物音同次可立拍子每文字 尔打一
拍子 尔二拍子 遠交天 打次神拳取物如振と有て此
前張を仕奉る事あり此を後小催馬樂と書小就て種
ニ小説の有る事ありとも上三百六十下六十已小註せり如
く手草を持舞小事より起りたるめて割被の義あり
備此も神樂と同トく後小ハ雅正たる樂ありハ有れ
とも此ハ天鈿女命の當昔よりして猿樂之本ハ別れ
さりけむ後小歌曲の追次て出来る小隨ひて割戯た
る可笑しき手振ハ亡て猿樂とハ殊異ある物成れ

今此朝金也註本
阿佐久良也支乃万三
止乃仁和加字礼波未
和加字礼波奈乃利
字志川ニ由久者天礼
て見又或季志朝金
季而而歌也未伊川
已加已乃字川奈加年
安在左古加依須也之加
ハ乃乃乃乃乃乃乃乃
一説本安佐久良也字
乃乃美奈止仁安比世
波多乃乃乃乃乃乃乃
幾安比計利未加川良
幾也和多重久加和乃
支波之乃古三三志
良須伊佐加八利奈奈
年々有ハ何れも神の
事畢と世にせ給ハ
意を語へるありハ
今古今傳大勳所
御身の畫目歌ハ
前繪隈川ハ野道
新時水詞ハ影を
た小見むと有ハ右の
類ハあり故此

りありけり 儲右の神拳の以前ハ畫目歌を謡ふ事
ハ其歌の本神音伊何加波加利典豆支和佐志天加阿乃
天留也此留女乃加見字志波志止音女年志波志止音
女年未伊止古何處仁可古乃遠川奈加年安佐比古可佐刺
須也遠可へ能多万左ニ能字へ耳太末左ニ乃字へ耳上
内侍所 有ハ本方ハ何許り且し態を為てり云
其態ハ神態にて上三百五十下六十謂ゆる俳優の事あり暫
留めむも末方の駒を敷糸がむも同ト事めて神拳とせ
御在し坐しめずして此小當奉るむと云るめて其神
態の終る事を可惜しとたる意あり其神拳と云ハ神

合尻等ハ三度拍子
 子用而即神ノ音振
 也目見え
 合ハ神樂とて上
 奉多歌と有り然
 九ハ如何とあり然
 為て暫時留奉
 可ナシと註おな
 未の歌ノ事と云
 るハ然事ナリ
 て名ハ

を下カ一奉りて歌儂の神態を成して慰め奉り今其
 事終て送奉奉言所作を成す即神樂是あり右ハ神樂取物如振
 マ有ハ前張ハ朝倉の下ハ神樂遊仁時ハ神音振マ有
 て其歌句ハ奈名乗乃利字志川ニ田行久者多誰古曾マ有も
 開越て人の行ハ係て神ノ散在アけ坐を云あり書目歌
 の本字の下ハ神音振唱マ書一弓立歌ハ但神宝奉時
 此歌唱琴懸様替マも有て此迄ハ神御の物ありト也
 今ハ神靈の上云給ト擬ハを為テ奉ハ有ける皇
 神宮行事記御石神事勤行次第ハ以テ御琴懸三度度
 毎有警躡次奉下神其御歌阿波利矢遊須度万宇佐
 遊波須度万宇佐奴安佐久良仁奈留伊加津千毛於利矢
 今ハ神靈の上云給ト擬ハを為テ奉ハ有ける皇
 神宮行事記御石神事勤行次第ハ以テ御琴懸三度度
 毎有警躡次奉下神其御歌阿波利矢遊須度万宇佐
 遊波須度万宇佐奴安佐久良仁奈留伊加津千毛於利矢

万志万世阿波利天遊没須度万宇佐安佐久良仁
 上津大鳴以下清知以不鳴不津知也其後御饌調備之奉
 内二可異後用所御費等不津疑也其後御饌調備之奉
 合二神如本但後所御費等不津疑也其後御饌調備之奉
 神御歌如本但後所御費等不津疑也其後御饌調備之奉
 る此ハ神樂引ハ非下御名申今度歸御申云ニ有
 有ハ上三引ハ非下御名申今度歸御申云ニ有
 火乃前仁出未三鳴高ニ引了神樂次第ハ先人長庭
 =云ニマ有テ先試樂の事有度次第ハ先人長庭
 阿知女法本方拍子取利出音阿知女次第ハ先人長庭
 て次利出音阿知女次第ハ先人長庭
 阿知女法本方拍子取利出音阿知女次第ハ先人長庭
 於ハ阿知女法本方拍子取利出音阿知女次第ハ先人長庭
 右ハ阿知女法本方拍子取利出音阿知女次第ハ先人長庭
 躡奉ハ故神マ有所此阿知女法本方拍子取利出音阿知女次第ハ先人長庭
 り後奉ハ故神マ有所此阿知女法本方拍子取利出音阿知女次第ハ先人長庭

○日本書紀傳十九

○三百九十九

事也此ゆて神樂の訓ハ一ハ上三百五俳優の下ハ
 知る可し神樂の訓ハ一ハ上十三丁俳優の下ハ
 引る神樂歌次第御神態有る依て神和邪と訓へ
 一ハハ神遊と訓へ一其ハ右の裏書御前作法次第
 其御神態の事を次本末乃音頭乃人各筋拍子遠取
 御神事遠始年一取物九種略中韓神拍子廿次御遊了
 天云ニ見えて上ハ御神事云るを兼て御遊云
 るハ更あり其採物の篠或本歌ハ布由乃典仁止典乃
 安所比遠又弓或本歌ハ須女加美乃止典乃安所比仁
 と有ハ豊遊ある事右三百七ハ云るか如く又其篠歌
 の末ハ佐々乃波字太布佐止ニ利天安所比ハ良志毛

叙歌ハ安須典利ハ久美乃遠志天ニ安所ハ太知波幾
 有る此安所布ハ本方ハ祢留波多賀古曾有る祢
 留ハ換たり當偕其祢留ハ上三百七ハ註せるか如く遠
 邊ハ字ハ常りて其も儼遊ハ事ハ取成したる者あり
 初ハ止里波奈久止毛安曾 不世遠久女有ハ島の
 遊居る所を云て神遊の事ハ係たる者あり前張本綿
 作末ハ安佐太川祢女志毛加美曾也阿所ハ安所ハ安
 所ハ安曾ハ安所ハ安曾ハ阿曾ハ也有り又本幾美
 毛可美所也安所ハ安曾ハ安所ハ安曾ハ安曾ハ末安
 所ハ阿曾ハ末之毛可美所安曾ハ安曾ハ安所ハ安所

春記長曆三年
 閏二月五日庚子
 内侍所御神樂の下
 十夜三點初御神樂
 先主上著御三神遊
 事畢歸宮有御
 猶更ある事共
 あり

三年中行事歌合
 侍所御神樂久
 方の天の音の神遊
 今も樂居の歌
 るる有を證
 為

大正
 御
 庫
 倉

へ安所へ安所へマ有り寔殿遊歌の本止其戸川比美
 安所比須良之又末比左可太乃安方能可没良仁止其
 へ津比美安 曾比須良之毛あどの安所比ハ何水も
 歌儂の事を云あれハ神樂ハ神遊ある事知べ
 若日子段小段屋を作りて日八日夜八夜以遊也有
 り天孫本紀饒速日命の神殞去給ひ所ハ日七夜七
 以爲遊樂云云其罷れハ神靈を招返す由ハ此
 の神樂の式を擬ハるハ其ハ遊マ云るを以知
 べハ然れハ神樂ハ神遊の如ク訓又神樂を加具良
 むあむ受張て正しき称ありける
 云も甚古き称ありけり其ハ夏被の事を夏神樂とも
 常の云て新古今集神祇部ハ延喜の御時屏風ハ夏神
 樂の心を詠侍りける貫之川社篠ハ折延へ乾す衣如

り
 字云ぬ
 南宮

十九ノ七
 大裕
 大島

